

ストライクウィッチーズ～あべこべ世界の炊事兵～

大鳳

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

目を覚ますとそこはあべこべなストパンの世界。原作を知らない主人公である伊勢崎正は男

女の価値観が逆転している中で男性初のウィッチ隊炊事兵となった主人公はウィッチたちとどう接していくのか!?

ストパン熱に浮かされてファンブックなどを参考に書きました。筆者の好きな要素をぶちこんで書いた作品です。

読みづらいと思われる点があると思いますがご了承ください。

注意!!

この作品のモットーは美女が野獣です。それが無理という方はブラウザバックを推奨します。

# 目次

プロローグ (修正版)	1
燃ゆる扶桑海	
1話 明野にて (修正版)	8
2話 遥かなるウラルの平原から	19
3話 新たなる脅威	31
4話 発動!! 撃一号作戦 そして酒は飲んでも飲まれるな	41
5話 地獄の蓋が開くとき	53
6話 死から逃れしもの	67
北欧の“いらん子”達	
7話 北欧に集いし者達	77
8話 襲撃	90
9話 吹雪の後の邂逅	105
10話 嵐の前の静けさ	112

## プロローグ（修正版）

唐突ながら皆さんは『郷ごうに入いっては郷ごうに従したがえ』と言うことわざを  
存じだろうか？

意味は、習慣などはその土地によって違うから違う土地に来たらそ  
の土地の文化や習慣に従うべきだという意味だ。

これに似た海外のことわざもある。

このことわざには、旅行や転居などでしかご縁がないと思つていた  
が異世界にも来た際にも使えるような便利なことわざだということ  
を身をもつて知ることになった。

自分がそう感じたのには少なくとも3つの理由がある。

まず1つ目は、いつも自分が睡眠を有難く享受している部屋ではな  
かったこと。自分が憶えている限りでは白い壁紙だったのだが自分  
が見つめている天井は明らかに田舎の祖父母宅で見たことのあるよ  
うな木目のものであつたうえに、掛布団があつたかい羽毛布団から防  
寒性のない薄い煎餅布団になつていたこと。

2つ目は、布団から抜け出そうとした際に手を見ると手が寝る前よ  
りもはるかに小さくなつていたがそれは枕元にあつた姿見を見るこ  
とで納得した。姿見に映つた姿は。写真で見たことのあるような子  
供時代それも4歳児の時の姿そのものであつた。

そして3つ目だがこれは言葉で言い表せないほどの衝撃をうけた  
ものだった。物音を聞きつけ母親が入ってきたのだが、常識的に考え  
てみるとスカートなりなんなりを履いているはずなのだが非常に言  
いづらいというより言いたくないが一世一代の気概を奮つていうと  
するならば下にはいているはずのものが『なかつた』のだ。もう一度  
言おう履いて『なかつた』のだ。

ちよつと読者の皆さんにも考えていただきたい。いかに若返つて  
いようが自分の母親がスク水を丸出しにしているのである。皆さん  
も、目を閉じて想像していただきたい。

自分はこんな母親の姿を見たときこれが夢だと思いたかつた。

先に挙げた状況を把握した際は、混乱したが頬をいくら引つ張ろうがタンスの角に足の小指をゴオオオオオル!!超エキサイテイイン!!しようが悲しいかな声にならないような痛みがあつたので現実だと受け入れるしかないようだった。

母親と、多少の間答を行ったところ予想通り4歳であるということが分かった。22歳であつたはずなので差し引き18歳ほど若返つたわけである。正に、体は子供頭脳は大人のような死神もとい名探偵状態になつた訳だ。肉体年齢が元の22歳になつた時には体感年齢が40歳のオツサンになるのだ。やべえ、超泣きたい。

用意されていた朝食を片付け周りの様子を調べてみる。居間においてある家具は自分の記憶と照らし合わせてみれば教科書に載っていたようなものが多かつたうえ、家造りは古民家造りと呼ばれているものであつた。外に見える光景は田んぼや所々に茅葺の家が建っているという一般的には農村と呼ぶような光景であつた。田んぼ仕事に精を出しておられる老人の方々、その横のあぜ道が無邪気に遊びまわっている少女たち。その少女たちもやはりスカートなどを履かずスク水丸出しの格好であつた。さすがに、おばあさん方は履いていた。自分は少なくともアブノーマルな趣味を持っていないと自負しているし見たくもない。読者の中にそんな趣味の方がおられるとするならば話は別であるのだが。

自分が置かれている状態を受け入れれば後は、気が楽だった。これは、両親がもとの世界と同じであつたという点が大きかったのである。スマホやパソコンなどは無かつたが無くては不便とは思わなかつた。無くてはもつらいと思わなかつたし、近所の子達と日が暮れるまで山や川などで遊んだり家業である農業を手伝うといった事があつたので以前よりも充実した日々を過ごせていた。

ただ以前からこちらの世界について不思議に感じる事があつた。それは男子の数が極端に少ないということだ。いくら村だといっても男子は10人くらいいてもいいはずであるのだが自分を含めても数人しかいない。女子はこれの10倍はいる。

また男子の扱いについてもおかしい。ある日、山で駆けずり回つて

服を泥だらけにして帰ったことがあった。母は帰ってきた自分の姿を見るなりこういったのだ。

「男の子なのにこんな服を汚して、もう少しおとなしくしたらいいのに。」

これを聞いた時は、一瞬理解できなかった。『服を汚して』ならわかるのだが『男の子なのに』という言葉が違ったのだ。

よくよく考えてみると、家事などは祖父や父親が行い力が必要とする作業を母親と祖母が行っている。こうしたことから鑑みるにこの世界は男女の価値観が以前いた世界とあべこべになっているようだ。

小学校の図書室で複数の本を開きつつこの世界の歴史を調べたのをまとめると以下のようなになる。

古来から男子の数は少なかったようで、必然的に女性が狩りや重労働などを担っていたようだ。女性の中には『魔法』と呼ばれる超常の力を使える存在がいたようでそんな女性たちのことを人々は魔女（ウィッチ）と呼んだ。ヨーロッパ方面では、時折『怪異』と呼ばれる謎の存在が出現したようだ。この『怪異』が放出する瘴気と呼ばれるものによって少なかった男性は減少していったようだ。悪いことは重なり不作や疫病といった自然災害が男性の減少に追い打ちをかけていった。向こうでいう日本にあたる扶桑でも源平合戦や武将達が群雄割拠する戦国時代などの影響によって男性が減少していった。男性の減少や怪異の出現に頭を悩ませたヨーロッパの権力者達は、怪異に対抗出来る存在であるウィッチや男性の確保のために、一夫多妻制を取り入れるということを行ったり、男性がいる家庭には生活費の援助を行うなどといったことを行い、男性の数を増やそうとしたようだ。しかしながら、これらを行っても男性の増加には至らなかったらしく、今でも男性の数は緩やかに減少を続けている。数が少ないということは希少価値が高まるということになる。例を挙げるならば、大航海時代での香辛料などだろうか？数が少ないものを多く持つていくということとはそれだけの力を保有しているという象徴になる。そのため、中世までは時の権力者たちは多くの男性を侍らせ自身の権力の強さを周囲にアピールしたようだ。いまや天然記念物や絶滅危

慎種と同じような存在になってしまった男性には過保護を通り越したような保護や庇護がありレディーファーストではなくメンズファーストという言葉が広く定着している。

若い女性が、『はいていない』には活動しやすいという理由のほか希少な男性に対してアピールする意味もあるようだ。中には「シタ

いと思つたときにすぐにできる」と男らしい発言をされた女性もおられるようだがそういったことに興味の薄い男性にとつては恐怖でしかない。男性の数が少なく競争率が高い中では様々なアピールの方法が編み出されているが、肝心の男性からは「目が肉食獣のそれだからシヤレにならんほど怖い」という意見で一致している。

自分が貴重な男性ということもあつて親戚一同は非常に自分をかわいがつてくれた。夏休み前半は宮崎にある母方の親戚宅へ行き後半になると舞鶴にいる父方の叔母の家で過ごすという夏休みの過ごし方が恒例となつた。移動が大変で疲れるが、それぞれの土地にいる友人に会えるということは非常にうれしい。友人といつても女子で年下である。向こうがどう思っているかわからないがいい友人関係を築いているのではないかと思う。舞鶴の友人たちは道場に通つていて少ないであろう自由な時間を使って会いに来てくれる。宮崎にいる友人は、友人より妹に近い。ひよこひよここと自分の後ろをついてくる姿は愛らしいしお菓子を食べている姿は小動物のそれを連想させる。

以前とは違つた世界で、2度目の生を謳歌する自分の今後を決定づけるような光景を見た。家の近くの田んぼが黄金色に輝いていたのだ。家路を歩いていた自分はその日のことを一生忘れることはないだろう。

その日初めて自分は魔女ウィッチと呼ばれる女性たちを見たのだ。

脚に何か機械のようなものを履き、実りに実つた稲穂の上を飛んでいた。二人一組で白い制服を着た女性と巫女服のような服を着た少

女だった。制服を着た女性が少女を抱きかかえるようにして飛んでいたが少女は地面との近きにあわてているようだった。自分が彼女たちを見ていることに気が付いたのか制服姿の女性が微笑みながら手を振ってきた。自分はつられるように女性に手を振り返した。

少なくとも彼女たちが見えなくなるまで手を振り続けていた。彼女たちが見えなくなるなり自宅までの道を全速力で駆け抜けた。見たばかりのあの光景を忘れないように誰かに伝えようと必死だったのだろう。

「さっき田んぼの上を人が飛んどった!!」

と言いつつ転げるようにして家に入ってきた自分に驚いていた両親だったが自分が落ち着けるように水を差しだしながら話しかけてきた。

「まあ、落ち着き。ウイツチさんを見たのは初めてだったか？ウイツチさんは、扶桑のために頑張ってくれとるんやで。まあ母さんもウイツチだったんやけどな。」

「懐かしいわね。近くに飛行学校ができたのは知ってたけどここら辺まで訓練飛行してるなんて。見たかったわね。現役だった時は、なかなか楽しかったわよ。だって空からきれいな景色が見られたんですもの。引退しちゃったけどお父さんと出会えたし。」

と惚気る母親。そんな母の惚気は耳に入ってこず、ただただ母がウイツチであったことに驚いていた。

初めてウイツチを見た日から気が付くと彼女たちが空を飛ぶ姿を追っている自分がいた。何と言ったらいいのがわからない。何故か彼女たちに惹かれたのだ。これが俗にいう一目惚れというやつなのだろう。

地上を離れ大空をエンジン音を轟かせ悠々と空を舞う魔女たち。いつしか自分では届かないような高い空を飛んでいる彼女達の姿を



もつと近くで見たいと思うようになっていた。

そして、自分は彼女たちの飛ぶ姿を近くで見ることのできる軍へ入隊することを決意した。

卒業を間近に控えた3月、自宅の和室で自分は陸軍の制服を着た女性と向かい合っていた。卒業後の進路として進学せずに軍に入ると家族に告げると反対されたが自分の意志の固さを知り最終的に折れて入隊することを認めてくれた。志願書を出したのは1月であったのだが何故かこの時期に個人面談が行われることになったのだ。

「このたび我が扶桑皇国陸軍に志願していただきありがとうございます。」

そう言って、頭を下げる女性。こちらも頭を下げる。

「本日個人面談をさせていただくことになった訳ですが、この書類について少々お尋ねしたい事があります。」

と言いつつ封筒から書類を取り出し差し出してくる。その書類は、自分で記入した志願書であった。どこか記入を間違えたかと一通り目をとしたのだがおかしいところは何一つなかった。そんな自分を見て軍人さんは書類のある一点を指さした。そこには、『航空歩兵隊配属希望』と書いてある。これがまずかったのかと思いきや軍人さんに恐る恐る尋ねた。

「勝手に希望書くのがまずかったですかね？」

と聞いてみたのだが首を振ってから

「そうじゃないんです。確かに、男子枠というものがありますがほとんどが事務方や陸軍病院へ看護師として配属を希望されますが、『航空歩兵隊配属希望』と書かれた方があなたが初めてなので人事部の方では何か書き間違えたのだらうということ面で面談を行うことになったのであります。もう一度確認しますがこの希望は間違いのないということでしょうか？」

と聞いてきた。むろんこちらはそのつもりで書いたのだから間違いであるわけがない。何も言わずに深くうなずいた。間違いではないということを確認した軍人さんは志願書を封筒の中に戻した。「わかりました。書類に間違いはないということ受受理されました。詳しい条件は後日お送りいたします。」

と微笑みながら言った。重苦しかった雰囲気から解放された自分はテンションが上がっていたのか軍人さんの手を両手でつかみながら何度も何度も「ありがとうございます！」と言っていた。

気が付くと軍人さんが顔を熟れたトマトのように真っ赤にしていたので手を離す。

「あつ。」と軍人さんの口から惜しそうな声が聞こえたが気のせいであろう。顔を真っ赤にして

「ご、ごひらごひよありがとうございますまひた!!」

と見事な敬礼をし危なっかしい足取りで玄関から出て行った。自分がしたことを自分がいた世界に当てはめて考えてみると、野郎ばかりの職場に入ろうとするJCに意志の確認にきて話を終えるなりいきなり握手を求められたということになるのだろうか。

いい加減こちらの常識に慣れねばと反省する自分であった。

1936年4月をもって扶桑皇国陸軍に自分こと伊勢崎正いせさきしょうは入隊した。この年の7月ヨーロッパではヒスパニア戦役と呼ばれる怪異との戦闘が発生した。

後に『扶桑海事変』と呼ばれるネウロイとの総力戦の1年前のことであった。

## 燃ゆる扶桑海

### 1話 明野にて（修正版）

気が付けば入隊してから2度目の夏の6月後半になっていた。陰鬱な色であった6月の空が通り過ぎ夏間近の晴れ渡った空にセミがアホのように鳴き声を響き渡らせている。そんな空をウイツチたちは鋼鉄の箒を身につけ飛んでいた。

去年の春に入隊した自分であったが人事の方では上へ下への大騒ぎであったそうだ。男性志願者はいるものの全員が後方で事務方や陸軍病院へ看護師としての勤務するよう自分で自分のように部隊勤務を希望したものは前例がなくどのような扱いをすればいいのかわからなかったようだ。生活環境を女性と同じ環境にするわけにもいれない。一緒にするということは飢えた肉食獣の檻の中に草食獣を放り込むのと同じくらい危険なことである。そのため男性である自分には個室が割り当てられることとなりその部屋で寝起きすることとなった。ただでさえ天然記念物と同じような扱いをされるほど貴重であるのに女性の集団の中に男性を放り込むことなどできるわけがない。もし同室にしたとして女性に男性が乱暴されるということが起き表沙汰になったとすると基地司令だけでなく陸軍首脳部総辞任などといった笑えないほどまずい事態になってしまう。この辺りの事情は人事担当の人から説明を受けたが、自分が入隊するまでに上層部の方で相当な政治内紛があったらしい。陸軍初の男性部隊勤務員を手元に置くことよって自身の派閥の軍内での発言力を強化しようといろんな派閥の人たちがあれやこれやと画策していたようだが現状は何とか落ち着いている状態のようだ。こうした事情を教えてくださいました人事担当の人は内ゲバに巻き込まれ体重が10キロほど落ちたと乾いた笑みを浮かべており非常に申し訳なかった。

紆余曲折がありながら入隊できたがキツイとは思わなかった。友人のほとんどが女性だったので同期で入隊した子たちとは仲良く過ごすことができた。軍管区内から集められるので同じ管区とはいっ

ても出身の地域は違うので別の地方について面白い話を聞くことができた。陸軍には内務班というものがあり14名で一斑を編成し食事や携帯品の管理、朝晩の点呼といった軍隊での生活を共に過ごすのだ。先ほども言ったように朝晩の点呼があるがこれがかなりのくせ者なのだ。自分が寝起きしている個室から所属している内務班の部屋までは大分距離がある。起床ラッパが鳴る前に起きないと確実に点呼に遅刻してしまう。入隊一か月目は2回ほど遅刻したが、いずれの遅刻も班長である軍曹から大変ありがたなお小言をいただいた。点呼後は基地周辺10kmを一時間ほどかけて走る。その後朝食、午前中は訓練を行い午後から座学という生活をおくる。訓練は銃剣術や射撃といった実戦的なものを行い、座学では陸軍刑法や軍人勅諭といった講義が行われる。昼食後の講義はたいへん退屈で眠たいものだが寝ないように鉛筆で手の甲をつつくという寝ないような努力を行っている。なにしろ軍曹殿から次に問題を起こしたら個人的にお話をしましょうと言われていたからである。そういった軍曹殿の目は目の前にいる草食動物にとびかからんとする肉食獣の目のようであったということは明言しないでおこう。

生活面などでは、女子から仲間外れにされるといような事もなく無事に基礎課程を過ごしていた自分であったがここで個人的な問題が生じた。それは、身体に心が追い付かないというものであった。日中の訓練で疲れて寝台に入っても3時間ほど寝ただけでなぜか目が覚めてしまうのである。今まで目を背けていたがここにきて向き合わなくてはならなかった。そう『老い』に対して。こちらに来たのは22の時であった。6月に肉体年齢は16になったのでこちらに来てから13年が経っている。つまり自分が感じている年齢は35ということになる。

この計算結果が出たのに対して納得できるところがあつた。こちらの女性は向こうでは美人や美少女と呼ばれるであろう方が多い。来たばかりのころは、ちよつと粉かけてみようかなというような下心があつた。だが今ではあの子かわいいやんと思うことがあつても、ちよつとお茶でも誘つてみようかなあと思うことがないのだ。例え

るならば、親戚の女の子を見ているような感覚なのだ。これに気が付いたときついに枯れたのかと一晩中枕を濡らしたものだ。

実年齢の壁と戦いつつ1か月が過ぎ、現在所属している中隊の中で特業兵と呼ばれる特殊技能を持った兵士が選抜される第一期検閲時期というものがあるのだが

「また個人面談でありますか？」

「いや、申し訳ない。なにせ君の立場が非常に難しくてね。特業兵に選抜するとしても変な所から横槍が入りそうだね。名目上こうして『男性隊員に対しての面談による意思確認』という非常にめんどくさい作業をしないとならんのだよ。」

と、申し訳なさそうにしている中隊長。現在中隊長室に呼び出されまた個人面談が行われている。立派な机の上には、様々な書類が山のように置かれている。

「ここ4か月の生活だけど問題点はなし。あえて挙げるならば、朝点呼に2回遅刻これは仕方ないから問題点ではないね。訓練や座学においても真面目に取り組んでいるみたいだから教官たちからの評価も高いねえ。」

満足げに手元の書類に目を通していった。書類に一通り目を通したのかこちらに目を向けてきた。

「でだ、この結果と陸軍省の人事からの通達で本来ならこのままだと二等兵だけど特別措置ということの上等兵候補に選抜されたよ。残り1か月以内にこれに対する教育を終わらせないといけないからまあがんばってね。」

につこりと、微笑む中隊長。

「確かそれって本来推薦じゃないとできないしいくらか段階があるはずでは？」

「いや〜それがね、人事の偉い人がいうには初の男性部隊員が一番下からというのはあんまりではないかということとでそこその階級につけようって上が考えたみたいらしくてこの決定がくだされたん

だつて。」

「どうやら男性に対する過保護さは軍隊にもあるようだ。」

「それと追加の話が2つあってね。そのうちの一つが本題なんだけど男子中学校にいたところの成績から判断して炊事兵に任命されることが決定したから。あと、配属先の話になるけど君の希望通り航空歩兵隊付として明野飛行学校になったから。」

一番大切なことをサラツと言われた。

「そういうのは先に言ってもらいたいものなんです。」

若干の抗議の意思を込めた目をむけながらいう。

「この書類の山からわざわざ君に関する書類を引っ張り出したんだぞ？それだけでも、いいと思わないのかい？」

そういつて、机の上に積み上げられた書類の山を指さす。今にも雪崩を起こしそうだが何故か絶妙なバランスを維持していて崩れそうにないこの山を中隊内では『書類のエベレスト』と古参の方々は呼んでいるらしい。これがいつ崩れるかということ賭けにしているようだ。真偽は定かではない。

個人面談による意思確認という建前による特業兵及び配属先決定は終わったわけであるが本当に大変だったのはその後であつた。転属までの1か月で受講する科目の数が増えたのだ。畜生、人事部余計なことをしやがってと心の内で毒を吐きつつ増えた科目の内容を頭の中に叩き込んだのだつた。

その後野飛行学校付に上等兵として配属されたが毎日2時頃に当直の兵士に起こされ炊事場へ向かい朝食を作ったのちに点呼に参加し炊事場に戻り次第昼食の準備をするといった生活を過ごしていた。食事を配膳するときウィッチ達の食事を見ていたが朝食には納豆が、昼食には加給食という名目で饅頭や羊羹といった甘味が付属していた。納豆が朝食に出されるのは、整腸作用が納豆にはあり腸内ガスの発生を抑え高高度を飛行しても腸内ガスが膨張し意識を失うといったことを防ぐことができるからであろう。

一日のほとんどを炊事場で過ごす生活には2か月もすればなれ調理に関して新しい技を覚える余裕が生まれてきた。炊事兵はその名目上前職がシェフや板前といった元料理人が優先して配属されることが多い。そういった人たちの技を覚えようとするのはなかなか難しいことだった。

軍隊生活には慣れたが未だに慣れないものがあるそれは女性からの視線だ。向こうにいたときにサークルの女友達(彼氏持ち)が女性には視線に敏感だからどこを見ているかがすぐ分かると酒の席で愚痴っていたのを冗談だろうと聞き流していたが冗談だろうと疑ったことを謝罪したい。立場が変わった今になって分かったがどこに視線が向けられているかが良く分かるのだ。まあ、野郎だらけの職場に女性がいたら見てしまうもんだしね。自分もバイト先の環境がそうだったのでそこは割り切って受け入れている。

炊事兵という職種上厄介なのは一日のほとんどを炊事場で過ごすため自分の面倒を自分で見れないという点である。そのため、洗濯物などをしてもらう代わりに余った食材などや甘味などを渡すことがあるのだが洗濯物を受け取る時顔を真っ赤にしながら渡してくる時があるが大丈夫だと思いたい。

上等兵候補に選抜された時もそうだが男性というだけで特別扱いを受ける。それを受け入れてしまってもよいのだろうか?とウィッチ達が訓練に励んでいる様子を見学しながらふとそう思った。少女たちが訓練に励んでいるのに対して自分は軍隊にいても男性であるという特権を享受してしまっている。少なくとも降りかかる火の粉は自分で払えるようにはならねばならないだろう。物は相談だと思いつつ訓練場から自分の職場である炊事場へと向かった。

ところ変わってストライカーが整備・保管されている格納庫では3人の少女たちが自分たちが使っていたストライカーが整備されている様子を格納庫の中にあつた椅子に座りながら見守っていた。1人

はゴーグルを頭につけもう一人は艶のある黒髪を腰まで伸ばしている。たもう一人は前述の少女たちとは違い巫女服のような飛行服ではなく陸軍の士官服を着用していた。

「いちいち飛ぶ度に発動機背負うのは辛いわね。」

と長髪の少女である穴拭智子が愚痴をこぼす。

「海軍さんでは、新型のストライカーの開発が進んでいるみたいだね。何でも発動機を背負う必要がないらしいよ。」

とゴーグルを頭につけた加東圭子が愚痴にこたえる。

「それはいいわね。発動機を背負う手間がなくなれば出撃がかなり楽になるじゃない。」

嬉しそうに士官服の加藤武子が答えた。それほどまでに発動機を背負うのは彼女たちにとって面倒くさいものであるのだ。そんな面倒な動作を行わなくていいというのは彼女たちにとってかなり魅力的なことなのである。新型ストライカー談義に華を咲かせていた3人だったが整備兵達の様子が普段と違ってすることに気が付いた。まるで遠足を次に控えた小学生のような雰囲気が出ているのだ。

「普段となんか様子が違うわね。」

「それはそうよ武子。だって明日は休みよ、遊びにでも行くんじゃないの。」

肩をすくめながら智子は答えた。ここで言う『遊び』とは『男遊び』のことである。希少な男性があんなサービスやこんなサービスをしてくれるという女性隊員にとって最高のストレス解消の場所である。事務方や陸軍病院といった男性がいるような後方の部署とは違い、歩兵や騎兵といった先頭に関係のあるような部隊に男性が志願を出すことはない。更に世間の男性の間では皇立大出のエリート官僚や一流企業に勤めるような女性の人気が高い。軍に所属している女性はあまり人気がない。軍に所属している女性で人気があるのは騎兵のような華のある部隊に所属しているような女性である。裏方である整備隊では男性に会う機会がほとんど言っていないほどない。そのため男性と会うことができる機会が『男遊び』だけである。それ以外では怪我などで陸軍病院に入院した際に運が良ければ男性看護師に看



護してもらうことができるといったくらいのものである。そのため、貴重な機会を明日に控えた整備兵たちは普段と様子が違ったのであった。

「浮かれて機体を壊されたらたまったもんじゃないわ!!そもそも、軍に所属していながら男にうつつを抜かすとは何事よ!!自分の職務を全うするのが軍人でしょ!!」

そう怒りをあらわにする智子。そんな智子に苦笑しつつ圭子は声をかける。

「でも、智子は男性に興味がないわけじゃないでしょう?」

今までの怒髪衝天といった様子から一転して顔を赤くしもじもじといじり始める智子。

「そ、それはないわけじゃないけどまず出会いなんてないし・・・」  
彼女たちウィッチは魔法力の発現が確認されると陸海軍それぞれのウィッチ養成機関に入校することができる。軍という組織上女性のみで環境で過ごすことになるため、話したことがある男性が自分の父親のみといったような子がいることが珍しくない。そのため男性との接し方がわからず話すときに挙動不審になってしまうものが多かった。また、ウィッチは20歳前後に魔力減衰が始まり退役もしくは予備役となりそれぞれの故郷へと戻るのだが、故郷に帰った時に目にするものが友人たちが結婚しているという光景を目にすることになる。そのため現役の間に結婚相手を探そうとするのだが男性との接し方がわからない上に競争率が高い男性という存在を逃さないようにがつついてしまう事が多くあった。ただでさえ、女性からの過激なアプローチに恐怖している男性であるのにウィッチ達のこうした行動がさらに恐怖心を増大させるものとなってしまっている。そのため小さな小さな男性コミュニティの中では『ウィッチはちよつと・・・』という風潮が漂っており男性がウィッチを避けるという事態に陥ってしまっている。

「私だって出来れば男の人と付き合ってみたいのに、訓練に次ぐ訓練だし休みの日に街に行っても甘味処行くだけだし見かける男はほとんど女連れだし。そうじゃない男がいてもこっちを見かけたらそそくさと逃げちゃうし。どうすりゃいいのよ。」

智子のはあとというため息とともに周囲を重苦しい空気が支配する。智子に男性の話題を振った圭子達であったが彼女たちも智子同様に男性と付き合いたいという願望を持っている。しかし、出会いのチャンスがなかったのだが最近になって男性と接することのできる機会を得たのだ。

「でも、<sup>明野</sup>ここに彼が配属されたじゃない。チャンスがあるかも知れないわね。」

若干の希望を込めてそう言う武子。武子の言った『彼』とは昨年8月に航空歩兵隊付き炊事兵として配属された陸軍初の男性部隊勤務員である伊勢崎正上等兵のことである。彼が明野に配属された当初基地内は彼の話題でもちきりであった。普段食堂ではなく仕出しなどを食べている士官たちが彼の姿を一目見ようと食堂に押し掛けたものだ。

「どうせ私たちウィッチなんか見向きもしないわよ。エリートさんでも目当てに来たんじゃないの?」

「でも、飛行服のほつれた所を縫ってもらったって娘がいるっていうし。噂じゃウィッチの飛ぶ姿に一目ぼれして軍に入隊したって聞いたけど。私の服も縫ってもえないかなあ。」

と自分の飛行服のどこかがほつれていないか探している圭子。

「圭子、それ噂じゃなくて本当のことじゃない? 私たちが訓練飛行している時滑走路の近くに立ってるのをよく見かけるし、訓練場でよく訓練してるのを面白そうに見てるって聞いたわよ。」

「単に私たちが飛んでいる姿が好きなだけでしょ。そういうのはよく聞いわ。てか、のど渴いたし食堂でも行かない? 食堂に行けばいいよというほど見れるわよきつと。」

そう言いつつ座っていた椅子から立ち上がりとした智子の目の前のテーブルに湯呑に入った麦茶が置かれた。ありがとうと後ろを振り向かずに感謝の言葉を伝え湯呑に口をつける。そこでふと前を見ると武子と圭子がメデューサをみてしまった人間よろしく固まっているのに気が付いた。

「一体どうしたのよ二人とも固まって。熊でも出たみたいな顔し……。」

冗談を交えつつ後ろを振り向くと今まで話題にしていた人物がいた。身長170センチ前半長身に作業の邪魔にならないよう短く切りそろえている髪。整っている部類に入るであろう顔に気まずそうな表情を浮かべている。

「あ、あんたいつからそこにいたのよ!？」

「少尉殿が、のどが渴いたとおっしゃられたあたりからであります。」

直立不動の姿勢を取り正はそういった。

「風呂敷なんか持ってどうしたのよ? 帰省でもするの?」

そういつて風呂敷を指さす武子。帰省するには時期が早いうえ、そんなに中身が入ってないようだ。

「いや、実はそこにおられる加東少尉殿にお願いがあつて参りました。」

いきなり名前を呼ばれた圭子。

「は、はい!! 何でしょうか!!」

慌てて返事をする。

「少々頼みづらいのですが射撃のご指導願えないかと思ひまして。あんまりいいもんがな」

かつたのでこんなものしか渡せないんですが。」

そう言つて風呂敷の中のものを取り出す。テーブルの上に置かれたのは羊羹や饅頭、金平糖といった菓子類であつた。軍に所属してい

るといつてもそこは10代の少女たちでありこうしたものには目がないのだ

「そのお願いは嬉しいんだけど、どうして私に？もっと教えるのがうまい人がいるでしょう？」

ここ明野陸軍飛行学校では主に空中射撃や空中戦闘の研究と教育を行っている。圭子よりも射撃がうまい人間がいるはずだがなぜ彼は自分に射撃の指導を依頼しに来たのだろうかという疑問をぶつけた。

彼は照れくさそうに頬を掻きながら微笑み

「食事の時にウィッチの方々の話が聞こえるのですが、射撃に関してなら加東少尉が右に出るものなしという意見が多く聞こえてきたものでして。それに自分の中で一番の決め手になったのはおいしそうに食事をさせていたからですかね。」

と言った。圭子はこの言葉を聞いて胸が高鳴るのを感じた。そして、この胸の高鳴りの正体に気が付き納得した。ああ、これが一目惚れというものかと。今まで恋愛小説を読んできたが環境が環境なだけにそんなことはないだろうと思っていたし男性との出会いに半ばあきらめかけていた。しかし、男性と出会うことができた上にチャンスが舞い込んできたのだ。圭子はこのチャンスを逃すつもりはなかった。

「そこまで言うなら仕方ないわね、私でよければいくらでも教えるわ。」

「ありがとうございます!!どうかよろしくお願いいたします。」

頭を深々と下げる正。そして正が見ていないのをいいことに智子と武子に対してドヤ顔を見せる圭子。そのドヤ顔をみて愛刀である『備前長船』を抜き圭子に切りかかろうとする智子。そんな智子を必死に抑えようとしている武子。その光景を遠巻きに見守っている整備員たちという奇妙な光景が格納庫では見られた。基地の上空では、夏の象徴ともいえる入道雲からポツポツと雨粒が降り出していた。

ヒスパニア戦役という大雨が過ぎ去ってから1年が経とうとしていた。人々は、平和という晴天を楽しんでいた。その中で誰が予測できただろうか扶桑海事変と呼ばれる豪雨が降ろうとしていることを。そして、その豪雨でさえ世界を長期間にわたって覆うことになる豪雨のきっかけに過ぎないものであるということ。。。。。

## 2話 遙かなるウラルの平原から

セミの鳴き声が空に響き渡るようになった7月、驚くべきニュースがもたらされた。扶桑海を航行していた戦艦部隊と『怪異』が接触したというのだ。これを受けた軍首脳部は軍を動員することを決定した。『怪異』との戦闘に備え平時の部隊配備から戦闘用の部隊配備となることが決定し、それにはここ明野も含まれていた。全国各地の優秀な航空歩兵を集め飛行戦隊としての編成が開始された。その中でも1番目の戦隊である飛行第1戦隊に選抜されたウィッチの中には加藤武子・加東圭子・穴拭智子の名があった。さらに、ストライカーの整備や飛行場の警備といった後方支援の人員も飛行場大隊という名目で編成されそれぞれの飛行戦隊に配属される運びとなった。

どうしてこんな話をしたかというとその飛行場大隊に自分も当然のように含まれていたからだ。『怪異』との接触が確認された日の夕方には人員の異動についての掲示が基地内で行われていた。翌日には自分の荷物をまとめたり簡単な引継ぎを行い新たな配属先へと向かっていった。配属先である飛行第1戦隊では今までの明野とは違いウィッチ用の食堂がありそこが新しい職場となった。今までとは異なり戦隊に所属しているウィッチ分だけの食事を作ればいいので時間に大幅な余裕ができ、空いた時間を射撃の訓練の時間に回すことができた。

しかしウィッチ達はこちらに配属されるなり毎日猛烈な訓練をしていた。朝日が地面から顔を出したと同時に飛び立ち燃料が尽きるまで空を飛びまわる。日中地面に降りてくるのは補給と食事というようなものだった。食事の時に出すご飯は定数より多めに炊いていたのにあつという間におひつが空になった。夕食時には日中の訓練の疲れからきた睡魔に勝てず食器を手を持ったまま寝ているといった光景を目にしたこともある。

海軍が扶桑海を越えて飛来してきた『怪異』と交戦したという知ら

せが舞い込んできたのは、新たな配属先に来てから一週間も経っていない7月7日のことであつた。その日自分は訓練中の補給のため降りてくる圭子さんたちに差し入れをしようとタオルやら菓子やらを両手に抱えて格納庫に入っていた。するとなにやら大騒ぎをしていた。その中に見知った顔がいたので近づいていき肩をたたいて声をかけた。

「何があつたんですか？陸軍大將が基地見学にでも来られることになつたんですか？」

ビクツと言う擬音が聞こえてきそうなほど驚いた様子を見せつつ振り向いてきたのは穴拭少尉だ。

「い、いきなりなに触つてんのよ!!そうやって軽々しく男が女に触るもんじやないわよ。勘違いされて襲われるかもしれないだから。私がムラムラして襲いそうになるのをこらえるのがどれだけ大変なことか分かつてる？」

なんかサラツと危ないことを言つたぞこの人。そう思つたのを知らずか騒ぎの内容を教えてください。

「何でも海軍さんが『怪異』と交戦したらしいわよ。その時に・・・。」穴拭少尉が何か言葉が続けようとしたその時にちょうど加東少尉と加藤少尉が訓練飛行から帰つてきた。この部隊では、フジとヒガシと呼ばれているので今後はそう呼ぶことにする。整備兵から話を聞いているようだがいまいち状況が理解できていないようで頭をかしげている。そんな二人の元へ駆けていく穴吹少尉。自分も慌てて後を追う。

「海軍さんが『怪異』と交戦したつてどこの部隊が交戦したのよ？海軍さんに実戦部隊はいなかつたはずよ。」

「でも噂じゃ舞鶴の部隊が交戦したらしいけどあくまで噂だしねえ。海軍に知り合いないし。こんなことになるんだつたら知り合いの一人や二人作つとくんだったなあ。」

そう言いながらフジ少尉が背負つてる発動機を降ろすのをヒガシ少尉と手伝う。

「舞鶴ですか・・・。厄介なことになつたなあ。」

舞鶴の部隊が交戦したと聞いて友人たちの顔が思い出された。泣き虫だけどくじけない心を持った子と固有魔法がうまく使えないことで自信を持ってない子そして乱暴な口調だが友達思いな子らだ。一昨年までは夏が来るたびに会っていたが軍に入ってから手紙を送ることしかできていない。戦闘に巻き込まれてないといいいんだが。そんな物思いにふけてっていると騒がしかった周囲が急に静かになった。顔をあげると当戦隊の戦隊長である江藤敏子中佐が手袋を脱ぎながら格納庫に入ってくるのが見えた。条件反射的に踵を打ち鳴らし敬礼の姿勢をとる。苦笑しながら敬礼を解除するよう身振りで指示してきたので楽な姿勢へと変更した。その時自分が持っていた風呂敷を渡すよう言われたので泣く泣く風呂敷を渡した。上官命令だからね逆らえないんだよ。

「どうして戦隊長がここに？」

風呂敷の中から金平糖や新聞紙に包んだドーナツを取り出しながら戦隊長が答えた。

「出撃命令が出されたからそれを伝えに来たんだ。それにな、戦となったら真っ先に出るのは私たちだからな、上に掛け合って最新鋭のキューナナの先行量産分を分捕ってきたぞ。」

そういつて格納庫の前に穴拭少尉たちと自分を連れて行った。そこにあったのは真新しいストライカーが置かれていた。塗装もせず運ばれてきた銀色のボディに扶桑の国章である日月紋が鮮やかに印されていた。

「うっわー、これが噂のキューナナですか！やったあ！」

嬉しそうにキューナナにペタペタと触り挙げるの果てに頬ずりをしだした穴拭少尉。今は日中であり太陽も高い位置にある。更に今日はうだるように熱い。こんな環境に置かれているということはかなり熱せられているはずなのだが。そう思っていると穴拭少尉が頬を押さえて地面を転げまわっていた。それを見ていたフジ少尉とヒガシ少尉はそれ見ろと言わんばかりな顔つきをしていた。

「まだ24戦隊にしか配備されてなかったのを譲ってもらったん



だ。」

豪快に笑い飛ばしている戦隊長。

「そんな最新鋭機をホイホイと譲ってくれるほど向こうも寛容ではないのでは？」

そうフジ少尉が質問をすると戦隊長はこちらに視線を向けながら

「こつちには最高の交渉材料がいるんだ。使わない手はないだろう？これを見せたら二つ返事で譲ると言ってくれたしな。」

そう言って手にしていた写真をフジ少尉とヒガシ少尉に見せる。何を見たのか片方は顔を真っ赤にしもう片方は鼻のあたりを押さえ、戦隊長にサムズアップしている。ねえ何見たらそんな反応するの？

この時自分は知らなかったが新型の譲渡の交渉に使われた写真は風呂上がりの写真だったようだ。ちなみにこの写真はウィッチ達の間流出し高額な値段で取引されたとのことだ。

「戦隊長出撃命令が出たって言いましたけどどこに行くんですか？」

鼻に詰め物をしつつヒガシ少尉が尋ねた。

「どこだと思う？浦塩さ。」

片手にドーナツを持ちながら江藤中佐はそう言った。そのドーナツ差し入れ用なんすけど……。

そのまま移動準備は進んでいき翌週には浦塩にいた。結局新型は譲<sup>分</sup>つ<sup>捕</sup>つ<sup>っ</sup>て<sup>て</sup>も<sup>ら</sup>え<sup>た</sup>4機のみに<sup>た</sup>った<sup>た</sup>よう<sup>だ</sup>。それ以外は旧式であるキューゴーが揃えられていた。武器も小銃や壊れやすい軽機関銃それと海軍から持ってこられた機銃が少量であった。一方一緒に降り

立ったはずの海軍は最新鋭の機材が揃えられていた。それを見た戦隊全員の恨めしそうな顔は忘れることができない。

浦塩では戦鬪らしい戦鬪はなく待機が続いていた。空の方は陸とは違い落ち着いた状況であった。待機といっても戦隊全部が待機するわけでなくあらかじめ割り振られたローテーションに沿って待機する部隊が決められていた。そのため暇を持て余しているような人が多かった。自分も海軍と仮基地を共同で使っていたので食事を海軍の炊事兵の人たちに作ってもらっていたこともあり暇であったので少尉たちのお供をしていた。ヒガシ少尉と浦塩の街に出かけて甘味の研究をしたり黒江少尉と釣りに出かけるといった事をしていた。

基地設営完了の報告を受け内陸部の陸海共同の前線基地まで移動したのだがこの際にひと悶着あった。本来ならば前線基地へと飛行場大隊ごと移動するはずなのだが自分だけ大隊から外され浦塩付近の飛行場に配属されかけた。噂ではお偉方が男性に何かあつてはいけないと急に決定したらしい。これを聞いた戦隊の隊員特に明野から一緒だった人たちはひどい有り様だった。穴拭少尉はずっと愛刀をカチャカチャ出したり戻したりしてたし、フジ少尉はブツブツ呟いてたしヒガシ少尉は泣きついてくるし落ち着かせるのが非常に大変であった。配属先変更は江藤中佐の交渉によって白紙になったようだ。

新しい基地は広大な平原をそのまま滑走路として利用した基地であった。滑走路設営の手間を考えて陸海の航空部隊は合同で飛行場を使用していることが多かった。この基地もそうであつたが海軍側の部隊は通常の部隊とは違い最新鋭の装備を優先的に受領できる実験部隊であるようだった。

「ここに配属される海軍さんで、この間怪異と交戦した部隊なんだって？」

昼下がり滑走路のそばでお茶を飲みながら今度配属される海軍の実験部隊の話をしていた。

「報告は受けてるわ。何でも第十二航空隊のあの部隊が着任するらしいわ。にしてもこのみたらし団子おいしいわね。」

フジ少尉がみたらし団子を食べながら穴拭少尉の質問に答えていた。戦隊長から海軍の部隊が今日到着する予定だと報告を受けてから皆そわそわしっぱなしなのだ。

「へえー、あの。技量の方はどうなんだろうな。是非とも手合わせを試してみたいものだ。」

腕を組みながら一人うなずいている黒江少尉。ピコピコと啞えている串を動かしているけどそれ刺さるかもしれないんで危ないですよ。

「噂通りなら面白いわね。あ、麦茶のお替り頂戴。」

そう言つて差し出されたヒガシ少尉の湯呑に麦茶を注ぐ。雲一つない晴天で過ごしやすい。前線に移動したものの未だ本格的な戦闘は始まつておらず待機状態が続いていた。炊事班ではこうした待機中に食べられるよう菓子類を多めに作っていた。余つた分はもらうことができるため穴拭少尉たちのお茶の時間に提供していた。ちなみに一部は戦隊長の手元に渡っている。

「いい天気ですねー。」

空を見上げつつ呟いた。その時トラックの音が聞こえてきた。

「補給のトラックか？補給が今日来るとは聞いていないが。」

格納庫付近に停車した車列に目を向けている黒江少尉。トラックからは次々と人員が降りてきてトラックの荷台の物資を格納庫に運び込んでいく。その中の数人がセーラー服を着ていた。それを見るや否や駆けだした穴拭少尉。残された人たちは一瞬あつげにとられて固まったが、すぐに後を追った。格納庫前についた時には既に穴拭少尉は海軍の所属であろう子を質問攻めにしていた。その子の顔を見た時目を疑った。なぜなら舞鶴にいるはずの友人である坂本美緒がいたからだ。ネウロイと交戦した部隊とは美緒ちゃんが出た部隊だったのか。質問攻めにされている姿をみて思ったのは無事だよ

かっただった。そして自分は声をかけるために美緒ちゃんに近づいて行つた。

「うっわあー、栗田の飛行場も広がったですけどここはもつと広いですねー。」

目の前に広がる光景を見て友人の竹井醇子は声を上げる。私、坂本美緒は舞鶴での航空型怪異との接及び撃破した経験を見込まれ北郷先生が率いる実験的最新鋭部隊として最新鋭ストライカーの試験を兼ねてウラル方面の防衛にあたることになった。そのため陸軍と共同で使用する前線基地へと到着したのだが目の前に広がっているのは地平線とどこまでも続いている平原そして彼方に見える山々といった光景だった。今まで見たことがあるのは栗田の飛行場だけであり、あそこだけでも随分と広く感じたがここはそれ以上だった。醇子が目を丸くするのも仕方ない。そんな醇子を余所にいつものように豪快に笑っている先生。

「はっはっは、確かにやたら広いね。ここでは陸軍の精鋭さんたちと共同で飛ぶから仲良くね。私は陸軍さんの指揮官に挨拶してくるね。確か……。」

先生がそこまで言ったとき陸軍の飛行服を着た人いきなり両手を掴まれ先日の舞鶴の件で質問攻めにされた。いきなりの事で返事ができなかつた。周りにはいつの間にか陸軍の人が3人程集まっていた。

「まったく何してんのよ智子。いきなりごめんなさいね。とりあえずあなたたちの所属と階級それに『飛行時間』を教えてくださいませんか?」

こめかみを抑えながら士官服を着た人が目の前にいる人を落ち着かせた。しどろもどろになりながら質問に答えた。

「えつと所属は扶桑海軍第十二航空隊北郷部隊の坂本美緒です。階級は一飛曹で、飛行時間は10時間くらいだったと思います・・・。」  
周りに集まっていた人たちがざわめいた。

「じゅっ…、10時間?10時間で実戦を経験したの!!」

「実戦なんてこっち来てからよ、私たち。」

「でも圭子、飛行時間はこっちの方が上よ。」

「飛行時間はこっちの方が上かもしれないけど、あつちは10時間しか飛んでいないけど実戦を経験してるのよ智子?飛行時間の多さより実戦で生き残っているの方が大事じゃないかしら。」

陸軍の人達が輪になって何やら話し合っている。どう声をかけたらいいかわからずおろおろしていると背後から声をかけられた。

「よお美緒ちゃん元気やったか?舞鶴の件で出撃したんやろ。ホンマ無事で良かったわ。」

聞き覚えのある声が聞こえてきて頭の上に手が置かれた。振り返るとまさかの人物がいた。

「正さん!!」

お兄さんのような人でそして今私が片想いをしている人だった。

「正さん!!」

大きくなつたなあと思ひながら美緒ちゃんの頭をなでる。身長差もあつてちようど撫でやすい位置に頭が来るのだ。美緒ちゃんの方は顔を真っ赤にしてされるがままになっている。髪がサラサラで撫で心地がいいからいくらでも続けたいのだが周囲の目もあるのでキリのいいところで撫でるのを止める。撫でるのを止めたとき、美緒ちゃんが悲しそうな顔をするが心を鬼にする。

「まさか海軍さんの実験部隊に美緒ちゃんがいるとは思わなかったわ。」

「私も正さんが前線に配属になつてゐるなんて思ひませんでしたよ。」

「いやな、6月までは明野におつたんやけど、7月の怪異が観測されたときに第1飛行戦隊配属になつてウラル方面の防衛任務を言い渡されて今ここにおるつちゆう訳や。ここに来るまでにもいろいろあつたんやけどな。」

苦笑交じりにここに来るまでの経緯を話した。

「それは大変でしたね。」

クスツと笑ひながら美緒ちゃんがそういつた。

「でもいい人らに会えたからよかつたかな。」

そう言いつつ格納庫の方に視線を向ける。視線の先には海軍さんが運んできた新型ストライカーを見ている穴拭少尉たちがいた。ストライカーと一緒に派遣された海軍の整備兵にあれやこれやと質問をしている。

「そうですか。私もここに配属されてよかつたです。あの、その、正さんと一緒にいられるから。」

顔を赤らめながらそう言つた美緒ちゃん。なんとなくこちらも話しかけるのが気恥ずかしくなつてしまった。その時「正さん」と自分を呼ぶ声がした。声が聞こえてきた方を見ると美緒ちゃんと同じ

ようにセーラー服を着た少女が走ってくるのが見えた。

「お久しぶりです!!」

そういつて挨拶してきたのは醇ちゃんだった。美緒ちゃんより醇ちゃんの方が付き合いは長い。自分が11歳の夏に迷子になった醇ちゃん(当時5歳)の手を握りながら交番まで連れて行ったのがきっかけだった。その後はなんやかんや遊ぶようになり醇ちゃんが道場に入門した際に美緒ちゃんにあつたのだ。美緒ちゃんたちの先生である北郷さんにもその時知り合った。

「おー久しぶり。まあ、一年見んうちに大きゆうなって。5歳の頃が懐かしいわ。」

そう言う醇ちゃんは顔を真っ赤にした。

「あ、あれはその、わ、忘れてくださいよう。」

若干涙目になりながら詰め寄ってきた。迷子になった時の事をネタにするとこんな反応が返ってくるのでついつい会うたびに言ってしまう。

「ごめんごめん。お詫びと言ったらあれやけどお菓子あげるから許してや。」

「え、いいんですか!!やったあ!!」

醇ちゃんがお菓子と聞いて目を輝かせた。心なしか尻尾をブンブンと振っているのが見えるような気がした。美緒ちゃんにも声をかける。

「美緒ちゃんも来るか?」

「はい!!是非!!」

「ならついてき。」

親嶋の後に続く小嶋みたいに自分の後についてくる二人。

「全くこんな平和な日が続きゃあいいのになあ・・・。」

その光景を見て思わずそうつぶやいた。

そのつぶやきは平原に吹き渡る風によって消えていった。

その頃基地の戦隊長室では江藤敏子と北郷章香が話し合っていた。

「舞鶴での怪異との戦闘はどうだったんだ」

と敏子が章香に先日舞鶴での怪異との戦闘について尋ねた。

「かなり危なかったな。それに部隊のほとんどが候補生というのも痛手だった。怪異が現れたのは20年も前の話だ。私を含めて誰も実戦を経験したことがないのは当然さ。死者が出なかったのが不幸中の幸いだろうな」。

そう言っつてコーヒをすすする章香。両者の間に沈黙が訪れた。だが沈黙が続いた時間はそう長くなかった。

「しかし海軍はいいよな、新型を配備する余裕があつて。浦塩で一緒だった海軍の部隊はほとんど九六式だったぞ。第一飛行戦隊うちじゃほかに部隊から分捕つて何とか4機揃えたというのに。」

と敏子が愚痴をこぼす。それを章香は苦笑しつつ聞いている。

「しかしその部隊もよく4機も持つていくのを許したな。一体どんな裏技を使つたんだい?」

と章香が尋ねると敏子がおもむろに席を立ち彼女の机の引き出しから封筒を取り出し章香に手渡した。

「こつちには『彼』がいるんだ。その中から少々過激なのを渡しただけさ。」

封筒の中には交渉に使う用として彼の写真が入れられていた。第24飛行戦隊との交渉に使った風呂上がりの写真や基地で飼っている犬と触れ合っている様子などが写真として保管していた。

「何枚か分けてくれないか?特に風呂上がりのが欲しいんだが。も



ちろんただでは言わないさ。」

「ならそつちの持つてきた九十七式機関銃を少々いたただくとするよ。持つてきた十一年式が故障しやすくてな。」

「そんなに多く持つて行かないでくれよ。書類をごまかす大変さはお互いに分かっているはずだろう？ いやしかし彼もなかなかいい体付きをしているじゃないか。道場で見学に来ていた時から、常々着やせしているタイプだと思つていたがここまでとは思わなかったな。ああ、たまらん。襲つてしまいたい。」

写真を食い入るように見ながらそう言つた章香。もしこの発言を弟子たちが聞いていたら彼女の株が世界恐慌並みに大暴落していただろう。対する敏子もあまり気にしていない様子だった。

「トイレならここを出て突き当りを右に行つたところだぞ。それとここで問題を起こさないでくれよ。私の首どころか上の方の首もまづいことになるからな。」

「ほんの冗談だよ。仮の話だが、彼から求められた際にはどうすればいいんだい？」

「まあ、まずそんなことが起こることがないだろうがもし起きたら私も呼んでくれよ？ 一応私は彼の上司にあたるんだからな。」

「ああ、もちろん。」

そこには固く握手を交わしている二人の姿があった。

### 3話 新たな脅威

魔力障壁<sup>シールド</sup> ウラル方面での怪異との戦闘は小競り合いから本格的な総力戦へと移行しようとしている気配が漂っていた。北郷少佐が率いる実験部隊が第一飛行戦隊に合流してから数日後、前線の偵察部隊から敵襲の報告が入った。この報告を受け両部隊のウィッチが出撃したが第一飛行戦隊は出撃が遅れ実験部隊が怪異を撃破した。陸軍の出撃が遅れたのは旧式のキューゴーを使っていたため発動機を背負う必要があったためであった。新型であるキューナナも4機配備されていたがテスト飛行中に不具合が見つかったため全て浦塩で調整中であった。この出撃後に戦隊長自ら浦塩に向き調整が完了していたキューナナを回収するという出来事が起きた。また海軍の使っていた96式も戦闘後に不具合が見つかり技術者が前線基地まで呼び出されていた。こうして陸海軍の新型ストライカーの初実戦は様々な課題を残したものであった。

秋に差し掛かっている九月。基地の待機室では智子たちがお菓子を片手に話に華を咲かせていた。

「やっとキューナナが正式配備されてよかったわね。」

「一時はどうなるかと思っただけ、発動機を背負わなくてよくなっただけで出撃にかかる時間が今までよりもはるかに減ったもんね。」

彼女たちが話しているのは九月になって正式配備されたキューナナのことであった。先月までは実用テストを行っては不具合が見つかり、調整しなおしては実用テストと言った具合であった。調整のた

めに浦塩へ送られて帰ってくるのは数週間後といった具合であり書類上ではキューナナを保有していても実情はキューゴーを未だ使い続けている状況であった。しかし九月に入ってから実用テストでのデータや保有部隊からのレポートをもとに不具合を修正された先行量産型のキューナナが少しづつであるが前線部隊に配備されるようになっていったのであった。

「キューナナは思い通りに動いてくれるからいいわよね。それにちよつとやそつとじゃ壊れないし。まあ航続距離が短いのが傷だけど。それ以外なら最高の機体よ!!あの対決の時にキューナナがあれば負けてなかったわ!!」

智子は目を輝かせながらキューナナのことについて熱く語る。先程智子が言った対決とは北郷少佐率いる実験部隊と第一飛行戦隊の間で行われた模擬空戦のことである。北郷部隊は新型の96式をしい対する第一飛行戦隊は旧式の95式を使った対決であった。

「いやーあれは面白かったわね。まさか飛行時間が10時間の子が『ツバメ返し』使ってくるなんて思わなかったわよ。あの『軍神』の部隊に所属しているだけあって技量も高いわね。」

そうやって窓の外に視線を向ける。視線の先には先程話題に上がった北郷部隊の子たちが体力錬成のため滑走路を走っていた。彼女たちの師匠は「壺にも式にもまず体力!!休むなよ!!」と檄を飛ばしている。

「今日も走ってるわね。早く一人前になつてもらいたいものだわ。」言葉とは裏腹に微笑んでその光景を見ている武子。

「そういや今気づいたけどアイツどこにいんのよ?いつもならこうして集まったらフラツと来るのに。」

どこか寂しそうな様子な智子。集まってだべっていると差し入れをもって来るのだが今日は顔を出していない。

「あそこで走っているんじゃないか?」

綾香が指さした先にはセーラー服を着た少女たちに交じって走っ

ている青年がいた。

「最近アイツ海軍さんと一緒にいるの多くない？」

「まあ付き合い長かったみたいだしそれに向こうの方からよく訓練に誘われてるみたいよ。で本人も断るのは悪いからって参加してるみたい。」

そう武子が言ったとき今まで口を開いていなかった圭子が口を開いた。

「マズいわね。これはかなりマズい。」

不穏な気配を醸し出しながらそういう圭子。

「何がマズいのよ圭子？お菓子だっておいしいわよ？」

恐る恐るといった様子で話しかける智子。

「違うわ。お菓子はおいしいわよ。」

「じゃあ、キューナナの事？キューナナは最高の機体じゃない。実際あれが来てから撃墜数がうなぎのぼりよ？なんか不満でもあるの？」

「キューナナのことじゃないわよ。私が心配しているのはねー」

「心配しているのは？」

圭子の言葉につばを飲み込む武子。

「これ以上恋敵との差が開くことなのよ!!彼は友達とか言ってるけど絶対相手側はそう思ってるわよ!!あの目は絶対恋愛感情を持つてる目だわ!!ただでさえこっちは2カ月ぐらいでしかないのにあつちが8年くらい付き合いあるわよ!!どうやってこの差を埋めればいいのかよ!!」

と吠えているいる圭子に対して、ああまたかこの色ボケといった顔をしている周囲。正のことが絡むと暴走する圭子という光景が見られるのは珍しいことではなく日常になりつつあった。特にこのような暴走は海軍の実験部隊が合流してから発生する頻度が増していた。「仕方ないじゃない向こうのほうが付き合いが長いんでしょ？こっちなんで一年行くか行かないかくらいの付き合いなんだから。」

綾香と智子に落ち着かせるよう目で合図され圭子に声をかけた武子。

「でも武子だって彼のが気になって、写真を買っているんでしよう？なら、なおさら海軍さんにとられるわけにはいかないじゃない。」

「ど、どうしてそれを知ってるの!？」

「そりゃあ、嬉しそうに広報員の部屋から出てくるのを見たら誰でも分かるわよ。」

圭子のその言葉に顔を真っ赤にする武子。圭子の言葉通りここ最近彼女は部隊内で密かに販売されているか正の写真を買っていたのだ。ちなみにこの写真は、広報目的で撮られた普段の様子のもので、コッソリと撮影された風呂上がりの瞬間と言った過激なものまでが販売されている。武子はこのうち普段の様子を収めたものを数枚ほど購入していた。圭子は言わずもがな過激なものを購入している。ちなみに、武子に地雷処理をさせようとした智子と綾香の両名も正の写真を買って集めていた。圭子と武子のやり取りを見ながら自分が声をかけなくてよかったと安堵している二人、彼女らもまた写真を購入していたのだった。そんな二人を余所に武子と圭子の会話はヒートアップしていた。

「そんなに彼を取られたくなかったらアプローチくらいかけてみなさいよ!!」

「そんな勇気があったらとつくにしてるわよ!!せっかく浦塩でデートできたと思っただけどこっちは恥ずかしくてそれどころじゃなかったわよ!!それなのに彼だったらこっちの気も知らないでハイあーんとかしようとしてきたのよ!!正直言ってそれを断ったあの時の自分に腕ひしぎ決めたいわ!!」

「何それ圭子。うらやましますすぎるじゃない!!」

「そういう武子だって話す機会多いじゃないのよ!!ちよつとぐらい話す機会を譲りなさいよ!!」

「私は圭子と違って遊びに行っていないのよ!!」

過熱していく二人。なすすべもなく見守る智子と綾香。二人の激論は話題になつて人物が部屋に入ってくるまで続いたのだった。

キューゴーからキューナナへと完全に機種転換を終えた第一飛行戦隊の面々は今まで満足にキューナナを使えなかったことに対するうつぶんを晴らすかのように撃墜数を増やしていていた。その活躍を聞きつけ本土からはるばる内陸の辺鄙な基地まで記者たちがやって来るようになっていた。新聞の紙面を“扶桑海三羽鳥？”扶桑海の荒鷲？“扶桑海の電光？”といった文字とともに穴拭少尉・フジ少尉・ヒガシ少尉の3名の写真と共に飾るようになっていった。自分も“陸軍初前線勤務員”として取材を受けた。この時の取材が乗ったものは普段の倍売れたらしい。自分のことはさておき彼女達の勇名は扶桑国内のみならず広くは欧州までどどろいていた。宮藤理論が採用された新型戦闘脚ストライカーと新型航空怪異との戦闘の戦訓を得ようと欧州各国が航空歩兵部隊の派兵を検討していた。特にカールスラントは、航空歩兵部隊の活躍が報道され始めたころには、ヒスパニア戦役で活躍したウィッチを観戦武官として新型戦闘脚と共にウラル方面に派遣している。活躍が華やかに喧伝されるということは、怪異の活動も活発化してきており地上部隊では陸戦型怪異との衝突も多発しており、小競り合いであったものから本格的な総力戦へと変化しようとしてきた。

だが、ここ最近では戦線の膠着が続いており前線部隊からの救援要請もなかった。このまま戦争が終わってくれればいいのにと思いつつ目を覚ますために顔を洗う。朝の少ししひんやりとした空気が心地よい。近くに置いてあるタオルに手を伸ばすが手は空を切るばかりだ。

「お探しのものはこれかな？」

背後から声をかけられ振り向きうっすらと目を開けるとタオルを差し出している、黒みがかかった茶髪をした長身のウィッチがいた。

「おはようございませうガランド大尉。随分とお早いですね。」

タオルを受け取り顔を拭く。朝とは言ったが今は朝日がまだ完全に上つてきていないような時間帯だ。

「目が覚めてしまつてね、暇つぶしがてら散歩しているとイイ男がいたから声をかけたまでさ。」

「そりやどうも。」

「その顔は信じてないな。こっちは朝から君を見ただけでもいい一日になりそうな予感がするというのに。当の本人に信用してもらえないとは悲しいよ。」

両手を広げやれやれといった仕草をしているのは観戦武官として派遣されてきたカールスラント空軍所属アドルフィーネ・ガランド大尉だ。初対面ではクールな印象を抱いたが話してみると意外と気さくな人物だ。

「すいませんねガランド大尉。あんまり容姿について言われたことがないもので。」

「そうだったのかそれなら仕方ないか。それと前にも言ったが公の場でなければアドルフィーネと呼んでくれと言つただろう。」

「ですがガランド大尉「アドルフィーネだ」アドルフィーネ大尉、いいでしょうかね?」

「上官がいいと言つたらいいんだ。江藤中佐も同じように呼んでみたまえ。きつと喜ぶぞ。」

いたずらっ子のようにそう言つてほほ笑むガランド大尉。今度やってみようかね。

「しかしだ、最近思うことがあつてね。」

「何でしょう? 彼氏でも欲しいんですか? あ、いえほんの冗談です。すいません」

ちよつとした冗談を言いたつもりだったのだがにらまれたので続きを促す。

「彼氏の方は君といういい人物が見つかったんだが、問題なのは本来の役目の事なんだよ。」

「あ、そつすか。」

「観戦武官として派遣されたはずなんだが、ここしばらく出撃がな

いだろう？私に運がないことを嘆くべきか、それとも世界の平和に感謝すべきか。やることといえば模擬戦に参加することとイイ男である君が作ったおいしい料理を三食食べることぐらいだ。ほかにこれと言ってやることもないしな。」

「おほめいただきありがとうございます。平和に感謝すべきではないですかねアドルフイーネ大尉。それと今晚の献立決まってるんですけどリクエストとかありますか？」

さりげなくメモ帳と鉛筆を取り出しながら訪ねる炊事兵の鏡。

「ウナギかテンプラというものを食べてみたいな。扶桑に来てすぐにこつちに来たものだからまだ食べれてないんだよ。何かできることがないか教えてくれないか？もしないんだったら今晚あたり夜這いでもかけようかと思ってるんだが。」

何か危ないこと言ったぞこの人。危ない発言をスルーしやることねえと考えつつテンプラに良い材料があったかメモ帳を確認する。

「それはやめてくださいね。やることと言えば後輩の指導とかどうでしょう？最近友人がなんか悩んでいるみたいなんです。いいアドバイスがあればしてやってくださいよ。ほら、いるじゃないですか眼帯つけている子がなんか『固有魔法』がうまく発動させられないって悩んでるみたいなんです友人としても何とかしてやりたいとは思ってるんですが。専門家じゃないんでどうしようもないですよね。それとウナギは無理ですけどテンプラなら鶏肉を揚げればできますよ。」

「ああ、坂本美緒だったかな。また、声をかけておこう。しかし鶏肉か、てつきりテンプラはエビとか使ってるものだと思っただがそれもなかなかにおいしいそう。楽しみにして晩御飯を待っておくよ。それとさつき夜這いをかけるかもしれないって言ったが—」

「てつきり忘れたもんだと持ってましたですがどうかしました？」

「やっぱり夜這いしようとおもうんだ。行くかもしれないから部屋の鍵は外しておいてくれよ。」

「やめてくださいねホントに!!国際問題になりますからね!!」

「なに君は天井のシミでも数えていれば終わる話さ。それに国際問



題になっても上の方が何とかしてくれるだろう。空戦ができなくなるのは悲しいことだがいい男を捕まえられるならそれもいいだろうと思ってるしな。そろそろ部屋に戻るとするよ。これ以上話していたら押し倒しそудだ。ハジメテはベッドでと考えているんでね。それじゃあ。」

そう言つて兵舎の方に去っていくガランドもといアドルフイーネ大尉。とりあえず戸締りをしつかりしておこう。ちなみに、朝食を配膳するときに江藤中佐を下の名前で呼んでみるとその日一日大変ご機嫌なご様子でございました。それはいいんだけど先生にも章香と呼べと言われました。別にいいんだけどね。

そんな平和が続いたのは束の間の事であった。基地内に警報が響き渡り戦闘部隊が出撃していった。陸で戦っている部隊からの救援要請だったようだ。簡単な迎撃の任務だったはずだが部隊が基地に帰投してきたとき穴拭少尉がフジ少尉とヒガシ少尉に肩を支えられていた。後で話を聞いたところ今まで違ったタイプの航空型怪異と戦闘になったらしい。今までと同じタイプだと慢心して穴拭少尉が格闘戦に持ち込もうと近づいたところ怪異の攻撃がありシールドを張ったが貫通しストライカーを損傷させ、その影響によって負傷したようだ。先生も軽い負傷をして戻ってきた。当然ながら穴拭少尉は医務室送りになった。新型ストライカーによってうつすらながらも終結の兆しが見え始めていたが新たな暗雲がそれを覆い隠してしまつた。

智子が目を覚ました時まず目に入ったのは木目の天井であつた。

「……はっ。」

そう言いつつベッドから体を起こす。周囲には自分が寝ているようなベッドがいくつか置かれていた。部屋が消毒液臭いことで医務室に寝かされていたということが分かった。無理をして起きたせいか腹部に鈍痛が走った。何で私はここにいるんだろうと思つたときにドアから入ってくる人物がいた。手に紙袋を携えていた。

「ああ、良かった。目を覚まされたんですね。寝ていた方がいいですよ。腹のあたりを怪我してますから。」

そう言いつつベッドのそばにあつた丸椅子に座り紙袋から梨を取り出しているのは正だ。

「どんくらい寝てたのかしら？1日くらいだと思うんだけど。」

「2日ほどですよ。聞いた話ではかなり無茶をされたようです。」

そう言われて思い出した。ガランド大尉が怪異の群れを発見して海軍の子が見慣れない型だつて言つてたけど私と武子と圭子のコンビネーションに勝てる相手なんていないと思つて、いつも通りに格闘戦を仕掛けようと思つたら怪異からの攻撃があつて魔力障壁<sup>シールド</sup>張つたけど貫通してストライカーに被弾してから視界が真っ暗になつて、気が付いたら医務室にいて。ああ、そうか私撃墜されそうになつたんだと思つたとたん体が震えた。新聞に「扶桑海三羽鳥」だなんだと取り上げられて慢心していたんだ。あの時圭子が助けてくれていなかったら今頃死んでいただろう。そのことを思い浮かべたとき震えが一層ひどくなった。震るえを抑えようと自分で体を抱きしめるけど収まる気配がなかった。

「大丈夫ですよ。」

その声と共に暖かい感触に包まれる。いきなりのことで分からなかったが正に抱きしめられていたのだった。震えもだんだん収まってきた。

「智子さんあなたが無事でよかつた。本当に良かった」

その言葉と共に目から涙がこぼれた。

「もう少しこのままでいさせて。」

涙声でそう正に告げる智子。そんな二人を見ているのは、医務室に

差し込む夕日とベッドの傍らに置かれた梨だけであつた。

この出来事より2か月後怪異の攻勢と新型怪異の脅威を重く見た扶桑皇国陸海軍首脳部は第一次ネウロイ大戦以来となる“大本営？を設置する命令を発令した。これにより後に“扶桑海事変？と呼ばれる戦役に正式に突入することとなつた。

#### 4話 発動!! 撃一号作戦 そして酒は飲んでも飲まれるな

9月半ばに新型の航空型怪異と接触し、智子さん（病室の一件からそう呼べと厳命された）が撃墜されかけるといふ出来事が起きてからというものの戦線のあちこちで新型が出現するようになっていた。この新型が厄介極まりないもので、以前のタイプなら従来の戦法の格闘戦に持ち込むことができたが、一撃離脱戦法を使用するようになったため格闘戦に持ち込むことが困難になっていた。また頑丈さが増し再生速度も桁違いなものとなっていた。そのため現在ウィッチ隊に配備されている火器は火力不足で、できるだけ近づかなくてはならず怪異との衝突事故が増えてしまった。現場からの度重なる火力不足という悲鳴にも近いクレームを受け、やっと腰を上げた陸軍上層部が送ってきたのがブリタニア製の重機関銃をライセンス生産した八九式重機関銃だった。だが、送られてきたのは銃だけであった。前線部隊から期待を持って迎えられた銃は配備された一週間以内に武器庫の片隅に山積みになられていった。新型の出現に伴い怪異の数も増え、一日に4、5回出撃するのはざらになっていった。多い日には二桁数も出撃していた。ウィッチ部隊の負担が増え部隊から離脱するウィッチも少しずつだが増えていた。新型怪異の出現と衰えを知らない怪異の攻勢を重く見た陸海軍のお偉方は11月20日に「大本営」を設立。本格的な戦争状態へと突入した。

そんな重大な局面になっているときに自分は何をしているかと言うと、舞鶴のちびっこ達と焼き芋をしようとしてます。何でやることになったかというと、食品の在庫チェックしようとして食糧庫に入ったら若ちゃんがさつま芋をコートの中に隠そうとしていたところを目撃したので、尋問したところ焼き芋をすると吐いたので黙認する代わりに混ぜてもらっているのだ。季節は秋から冬へと移ろうとして

いるので吐く息は真っ白で外に出るにはコートが手放せない。手に持っているミカン箱を地面へと下ろし細い枝を集めている若ちゃんを手伝う。基地近くの木々は葉が落ち裸になっているのでかなりの枝を見つけることができた。枯れ葉を小さい山状に積みその上に集めた枝を置いていく。置いていく際に空気の通り道を作るのがポイントだ。

「ほ…ほんとに大丈夫なのかなあ…？」

そわそわしながらあたりを見渡している醇ちゃん。対照的に若ちゃんは余裕綽々といった様子でマツチを擦って用意した火元に火をつけようとしている。

「平気平気♪隊長たちは朝っぱらから軍議で詰めてるし、夕方だから灯火管制にも引つかからないしな。それに正さんから焼き芋しようって誘われましたって言ったたらそんな怒られないって。」

「おう若ちゃんサラツと俺に罪かぶせんのやめーや」

「ぶ、ぶごめんささい正さん。だからヘッドロック外してください。なんか頭からミシミシって音が聞こえてきたんすけど。ちよ、これ以上やったら割れる、割れるからやめて!!」

火をつけ終わり焼き芋に対する全責任をおつかぶせようとしてきた若ちゃんにヘッドロックを決める。タツプが入ったのと若ちゃんの声が涙声になってきたタイミングでヘッドロックを解除する。両こめかみをさすりながら涙目になっている若ちゃん。しまったやりすぎたか。

「だいたい正さんもあの軍議に参加すべきじゃないんすか。何でも正さんの一言で決まったって聞きましたけど」

「あ、あれねうん。俺もあんな一言で作戦が決まるとは思いもせえへんかったわ」

若ちゃんが言っていた軍議とは、新型怪異撃滅の可能性を探るための作戦会議なのだが作戦の基本的なプランを決めたのは自分の不用意な発言からだった。破壊するには今ある火力じゃ足りない、かと言って強力な火器があるわけじゃないといった問題に頭を抱えているところにお茶くみとして参加していた自分が、爆弾でも落とすやい

いんだと冗談を言ったところ「それだ!!」と徹夜明けのテンションの皆さんに承認され作戦が立案されてしまっていた。

「正さんはカールスラントに行ったりしませんよね!？」

涙目でそう聞いてくる醇ちゃん。行かへんよと返事をする。あの発言の後ガランド大尉から「こんな自由な発想ができる人物を眠らせるのはもつたいたい是非コンドル兵団で働いてみないか」とカールスラント空軍にスカウトされたのだ。条件は9時5時で6カ月賞与、完全週休2日制という超ホワイトな条件だった。思わず首を縦に振りそうになったがその時に目が合った江藤中佐と先生の背後に般若が見えたので保留するとガランド大尉に返答した。

その後江藤中佐と先生がガランド大尉とにらみ合っていたようだが見なかったことにした。

「ま、腹が減っては戦はできぬってな。難しい話は置いてそろそろ焼く準備でもしようぜ。」

薪の様子を見ると火が落ち着くまでもう少しかかりそうだった。ミカン箱から芋を取り出し、一緒に入れていた新聞でさつま芋を包む。その後水でしつかりと濡らしアルミホイルを巻き付ける作業を行った。醇ちゃんと自分が黙々とその作業を続けている傍らで若ちゃんは肉を焼いていた。晩飯でも抜いてやろうかと嬉しそうに肉が焼ける様子を見守っている若ちゃんを片目にそな考えが頭をよぎった。それとは対照的に美緒ちゃんは心ここにあらずといった風であった。

「なんだよ美緒? まだ “あの事” を気にしてるのか?」

若ちゃんのかけたその言葉に美緒ちゃんの肩がビクンと揺れた。

「…だって…あの時…」

美緒ちゃんの言った “あの時” の意味が分かったのか若ちゃんが黙り込みあたりが沈黙に包まれた。薪の立てるパチパチという音が響き渡る。白くなった薪の中にアルミホイルに包んださつま芋を押し込む。

「だからありや、お前が責任を感じる必要はないって先生も言っていただろ! みんな生きて帰ってこれたんだ。…それだけでいいじや

ないか。もともと陸さんが突つ走らなきやよかつたんだよ」

長い沈黙を破って若ちゃんが美緒ちゃんにそう言った。

「でも…」

『でも』や『だって』も必要ねえ！後悔してる間にも奴らは来るんだ。そんな暇があつたら次はそうならないように強くなれ!!」

一瞬キョトンとしていた美緒ちゃんだったが若ちゃんの言葉にうなずき笑顔になった。醇ちゃんもニコニコしながらその様子を見守っていた。それを片目で見ながら先程火に入れた芋を取り出す。アルミホイルや新聞を剥がし芋を割ってみる。うまい具合に火が通っており断面が黄金色をしていた。

「ほら美緒ちゃん、焼けたで。熱いから気をつけてな。醇ちゃんも食べや」

「あ、ありがとうございます。」

「正さんありがとうございます」

そういつて焼けた芋を受け取る二人。若ちゃんにも芋を渡そうとすると何やらごそごそとしていた。その傍らにはどこに持ってきていたのか薬缶があつた。

「何してんの若ちゃん。てか、それはフジ少尉のコーヒーミルじゃん。何でもってんのよ?」

「いや陸軍の方々がおいしそうに飲んでたから、ちよつと拝借してきました。たしかここをこうやって。」

そうやってコーヒーを入れようとしている若ちゃんを美緒ちゃんは見詰めた目で、醇ちゃんは止めようとしていた。

「勝手に持ってきてきちゃだめだよ」

「大丈夫だつてちよつと借りただけだから。ほら出来た、香ばしくておいしそうだ!」

若ちゃん、借りたつて言ったけどそれを世の中では盗ってきたつていうんだよ。そう思っている自分を余所に美緒ちゃんと醇ちゃんにコーヒーの入ったカップを渡す若ちゃん、よく見ると若ちゃん自身も分も入れてある。

「正さんも飲みます?」

軽く手を振っていらぬという意思を若ちゃんに伝える。少し残念そうな顔をした若ちゃんだったが、自分で入れたコーヒーをすする。それにつられるように美緒ちゃんたちもコーヒーをすすった。

「……………にがつっ」

ものすごい表情をしている三人。まあ、いきなりブラック飲んだらそうなるわなと苦笑しながら江藤中佐たちへのお土産用に新しい芋を焼き始めた。コーヒーミルどうやって返そう……。

大本営が設立されたことよって、かねてから陸海軍共同で検討されていた新型怪異撃破の可能性を探る作戦『撃一号作戦』別名『伊勢崎プラン』が発動されることになった。自分の名前が付けられるのは恥ずかしいが江藤中佐たち曰く、作戦に重要な発言をしたのに名前を入れぬのはおかしいとのこと。自分の名前が付けられた。肝心の作戦内容は、高度9000メートルに位置に索敵・無線誘導班を配置。その2000メートル下には攻撃班。誘導・囮班が高度5000メートルの位置に新型怪異を誘導し、攻撃班が急降下爆撃を行いこれを撃破するといったものだった。作戦の要となるのは速力と急降下性能に優れたBf-109だ。しかし、カールスラントからテスト用を持ち込まれたのは予備を含め2機のみだった。ガランド大尉の僚機を巡って調整が難航した。僚機を決める意見としてはじゃんけんやくじ引きといったようなものが出たが当然却下された。格闘戦に向かないという機体特性や急降下爆撃の確実性を重した結果、3次元空間把握能力を固有魔法とするフジ少尉が僚機となることで落ち着くこととなった。綿密な準備と打ちあわせの下撃一号作戦は発動された。



11月22日撃一号作戦発動から3日目3回目の出撃でも未だ例の新型怪異との接触を図れていなかった。秋晴れの空に二筋の飛行機雲を引きながら二人のウィッチが飛んでいた。

「どうだい？B f—109には慣れたかい？」

そう言いながらガランドは僚機である武子へと声をかけた。

「・・・はい、大体わかってきたと思います」

「ほう・・・それなら私は失業かな」

その言葉を聞いて慌てる武子。

「あつ・・・失礼しました。そんなつもりでは・・・」

「冗談だよ。気にするな。『上』の方はどうだ？」

慌てる武子の様子に微笑みながら、上空で索敵に入ろうとしている美緒と連絡を取る。

「目標高度に到達しましたが。少し風が強いので寒いです・・・」

コートを着ているものの頬を撫でていく風は冷たく美緒は少し体を震わせた。

「しっかりと頼むぞ、目が見えないと手足をどう動かしたらいいかわからないからな。——北郷様子は？」

「異常なし。憎たらしいほどにいい天気だよ。・・・坂本焦る必要はないぞ、落ち着いてやれば大丈夫だ」

第一飛行戦隊の面々に交じって飛行している章香。

「よし!!今日こそ仕留めて帰投しよう!!」

ガランドの号令の元3回目の作戦が開始された。右目の魔眼に魔力を集中させる美緒。目の近くで両手の親指と人差し指を合わせた長方形を目の近くで作っていた。これは魔眼の見える範囲を強化する方法を正に相談した時に、「全部の景色が目に入ってくるから集中できないんでね。ガランド大尉みたいに照準器使ってるみたいに見える範囲を制限してみるとかええんちゃう？」とアドバイスをされ、その方法を探していたときに武子たちが写真を撮ろうとしており指でフレームを作り風景を切り取っているのを真似したのだ。ちなみに武子たちが撮ろうとしていたのは木陰で昼寝している正の寝顔であったことをつけ足しておく。

(この方法なら前よりずっと集中できる・・・！これなら！)

視界が制限されたことによつて右目に魔力を集中させやすくなつたことにより以前と比べ遠方を視認することができた。光を反射したものがあり、怪異が三機編隊で飛行しているところだった。

「目標三機編隊を捕捉!!・・・方位335から180へ南下しているようです!高度は約4000m、距離は約20000mくらいです!」

目標発見の知らせをガランドへ伝える美緒。胸に下げていた照準器で報告があつた方向を視認するガランド。美緒の報告通りに怪異が飛行していた。

「よくやった!こちらでも捕捉した。以降はこちらから誘導する。加東少尉そちらから視えるか?」

「ええばつちり視えました」

無事に索敵の役割を終えた美緒は安どのため息をついた。そんな美緒の胸に醇子が飛び込んでくる。自分の班の役割を果たせたので嬉しそうだ。

「・・・あとはあれがちゃんと当たってくれればいいんだけどな・・・」  
そんな二人とは対照的に徹子が珍しく不安そうな面持ちをしていた。

「今ッ入り」ました。」

固有魔法を発動していた武子は怪異が急降下爆撃のコースに入つたことをガランドへと告げた。囃班が怪異の攻撃を絶妙な機動で躲しつっ誘導している。

「よし—我々も働くとしようか」

そういつて急降下の体勢をとるガランド。武子もそれにならう。囃班は怪異から攻撃されていたが囃班に選ばれただけあつて猛者が

そろっているため被弾することはなかった。絶妙な魔力障壁のコン  
トールで怪異の攻撃を逸らしていく敏子。十分に怪異を罠へと誘い  
込んだことを確認する。

「そろそろか．．．。あまり調子に乗るなよ．．．!!」

その時急降下していたガランドと武子が現れた。怪異の未来位置  
と爆弾の軌道が合うようなタイミングで爆弾を投弾する。怪異が躲  
そうとするもタイミングが間に合わず自ら爆弾へと突っ込んでいっ  
た。周囲に閃光が走り、爆炎がもうもうと舞い上がっている。全員固  
唾を飲みながら爆炎を見守る。

「反応は消えたようですが．．．」

固有魔法を発動させていた武子がそう漏らしたとき全員に無線が  
入った。

「観測員より連絡あり。閃光の後対象の姿を確認できず―。成功で  
す!!」

その報告をうけ、一瞬あたりが静寂に訪れ、そして割れんばかりの  
歓声があたりを包んだ。こうして新型怪異撃墜を探る撃一号作戦別  
名『伊勢崎プラン』は成功に終わった。

冬に入った12月、各国から派兵されていた航空歩兵隊が撤収する  
時が来た。当然その中にはガランド大尉も含まれていた。

「いろいろと助かったよ。」

「何気にするな。こちらこそいいデータが採れたし、今後の我が空  
軍の方向性を確認することができたんだ。安いものさ。」

そういつてガランド大尉へ声をかける先生。美緒ちゃんも魔眼に  
ついていろいろレクチャーを受けたのだらうお礼の言葉を述べてい  
た。自分も声をかけておく。

「ガランド大尉、大変お世話になりました。自分の役職上もつと扶  
桑食を食べてもらいたかったんですがね。いやこればかりは補給の  
問題もあつて申し訳ありませんでした」

「そんなに謝るようなことじゃないさ。辺鄙な場所でイイ男がいた上に、手作りの料理まで食べられたんだ。これ以上の贅沢はないさ。それとカールスラントに來ないか聞いたが、まだ私はあきらめたわけじゃないからな。気が変われば連絡したまえ。君からの電話だったらいつでも大歓迎だ。その場合はこの書類にでもサインしてくれるとありがたいがね」

と、何か記入された紙を渡された。大半がカールスラント語で書かれており内容を判別することができないので後で分かる人に見せるとしよう。

「ガランド、彼は扶桑皇国の人間なんだ。あまり他国に勧誘しないでもらえるとありがたいのだが？」

「何を言う北郷。私は彼に惚れ込んだのさ。私が我慢できる間は預けるが、我慢できなくなった時はいたたくとするさ。」

そうやって話しているガランド大尉と先生。お互い笑顔で話しているが背後には龍と虎がにらみ合っているのが視えた。先生の後ろにはいつの間にか江藤中佐もいた。

「あ、そういうことさ。それじゃあ」

そう言い残しガランド大尉を乗せた輸送機は飛び立っていった。ちなみにガランド大尉からもらった紙を先生に見せた所笑顔で破られました。怖かったです（小並感）

年を越した1月、到来した厳しい寒波によって若干の怪異の活動に鈍りが見られるようになった。これに併せて陸軍はキューナを全軍に配備し限定的に行われていた機種転換を本格的に行うことになった。また新開発された武装や輸入された他国の武装も試験が開始された。しかし新型怪異は未だに大きな脅威であることに変わり

はなかった。陸海軍ともに機種転換はそこその状態であったが、怪異との如何ともしがたい性能を埋めるために新型のストライカー開発の必要性に迫られた。海軍では『十二試艦上戦闘脚』を、陸軍では遅れること4か月をして『キ43/44』の試作指示が出された。自分が所属している第一飛行戦隊では、冬までの出撃で負傷し後送されたウィッチや魔力切れになってしまったものなどが増え小隊規模にまでなってしまった。一時期はほんとにひどい状態で怪異の攻勢と共に食事の内容も変わってしまった。8月までは普通の食事だったものが、9月末にはうどんや素麺といった消化に負担のかからないものになり11月中旬にはお粥を出さなければならぬほどウィッチの疲労がたまってしまった。粥を食べることができないのはまだましな方で疲労がひどいウィッチでは、乳酸菌飲料や流動食しか食べることでできない人もいた。そんな人たちを見るのは大変つらかった。最近、出撃回数が減少したのとフジ少尉の得体のしれない強壮剤のおかげで普通の食事を出すことができるようになっていた。得体のしれない強壮剤を飲ませてもらったことがあるが数日の間味覚が麻痺してしまった。もう飲まねえぞあんな生物兵器はと固く誓った。

「大変急ですまないが明日から2日ほど休みを取ってくれないか？」

突然江藤中佐に呼び出され突然休みを言い渡された。

「随分急な話ですね。しかし、自分が抜けても大丈夫ですかね？ 食事の心配があるんですが」

「厳しい状況が続いてたとはいえ、君は7月辺りから休暇を取っていないだろう？ いい加減休暇を消化させないと人事部がうるさくてね。それに食事の方なら多めに作るように言っておくさ。」

「それならいいですよ。ありがたく休みをいただきます」

「そうしてもらったところすまないがホントの目的があつてな。北郷が教え子たちと浦塩に行くようでお供をしてもらいたいんだ」

「それでもいいです。休みは休みに変わりないです。それでは失礼します」

そう言つて部屋から退出する。さて、お土産はどうしようか……。

久しぶりの浦塩は大変楽しかった。だが今重大な問題が発生していた。なぜか美緒ちゃんが自分に馬乗りになつていたのである。頬は紅潮している。経緯を簡単に説明すると先生が鎮守府で用事を済ます間美緒ちゃん達の面倒を見てくれと頼まれて街を歩るいていた。そこまでは良かった。しかしマズくなつたのは出店のサイダー屋に声をかけられてからだつた。少量のお酒がサイダーに入つていたようで美緒ちゃんの様子がおかしかつたので声をかけた所、押し倒されたのだ。

「ねえ、正さん？どうしましたあ？」

回想に浸つてしていると美緒ちゃんから声をかけられた。顔に年齢からは考えられないような妖艶な笑みを浮かべており正しく魔女のようだった。

「ど、どうしたんや美緒ちゃん。落ち着いて上からどいてくれへんか」

「いいですよ。でもね」

どうしたんだと言おうとしたとき唇に温かい感触がおき、口内に何が入つてきた。そのなにかは口内を蹂躪していく。突然のことで頭が真っ白になる。美緒ちゃんが口を遠ざけた時銀色の橋が架かっているのが見え淫靡さが漂つた。

「正さんが欲しいなあなんて思つちやいましたね。正さんは雲でも数えてくださいよ。すぐ終わりますから。不安そうにしないでくださいよ。ますます興奮しちゃうじゃないですかあ。大丈夫本で読んだことありますから。すぐに終わりますよ」

妖艶にそう迫ってくる美緒ちゃん。若ちやんたちに助けの目を向

けるも若ちゃん顔は顔を真つ赤にして固まっている、醇ちゃんはそう思ったとき美緒ちゃんの後ろに人影が現れた。その人影は美緒ちゃんの首に腕を巻き付け3秒ほどで美緒ちゃんを絞め落とした。

「独り占めはダメだよ美緒ちゃん。約束したでしょ？正さんとは二人仲良くするって。」

その人影は醇ちゃんだった。

「正さん大丈夫ですか」

覗き込んできた醇ちゃん顔は笑顔だったが目が笑っていないかった。どこか蜘蛛の巣にからめとられていくような感じがした。

「ねえ、正さん。私は正さんに迷子になっていたところを助けてもらってからずっと正さんのことが好きだったんですよ。それにウィッチだからって嫌がらずに好意的に接してくれるところも好きです。きつと正さんのことを好きな人はいっぱいいると思います。けれども私はあきらめたりしませんから。絶対正さんを私にもものに見せます。そのための努力ならどんなことだってやって見せます。それだけでも覚えていてくださいね」

そういつて頬にキスをされた。日頃のびくびくしている彼女からは想像できない一面だった。

「あのく正さん。そろそろ移動しませんか？周りの視線が」

声をかけてきたのは若ちゃんだった。背中には気絶した美緒ちゃんを背負っている。

「おう、そないしよか!!ほんとご迷惑をおかけしました。」

お金を取り出しながらサイダー屋のおばちゃんに声をかける。

「いや、迷惑かけたのはこっちだからお金はいらぬよお兄さん。しかし、お兄さんも難儀だねえ。こんなにウィッチに好かれるなんて。ま、頑張って」

おばちゃんからそう言われる。今後どうなるんだろうなあと思いつつ鎮守府までの道を醇ちゃんを背負いながら歩いて行った。

ほんとどうしてこうなった……。

## 5話 地獄の蓋が開くとき

年も明け初春を迎えたころウィッチの消耗を重く見た軍上層部は戦力の平均化を狙った部隊の再構成を行った。訓練が終わったばかりのウィッチを古参部隊に配備し鍛え上げさせ、まだ戦うことのできるウィッチを新部隊に送り込み戦力の底上げを図るというものであった。第一飛行戦隊は当然その対象となりフジ少尉とヒガシ少尉それと黒江少尉が別々の部隊へと転属となった。江藤中佐と智子さんはそのまま第一飛行戦隊へ残ることになった。また新部隊の創設によって人員の移動も行われ補充人員の配置と共に兵長へと昇進することになった。

戦力を増強したが春を迎えたころ寒波の到来によって活動が鈍っていた怪異が再び活発化した。戦力の平均化を図ったばかりの各部隊では苦戦を強いられベテラン、新兵問わず戦力を徐々に削られていた。また後方では補給線の伸びという致命的な問題も発生していた。扶桑本土では戦時生産体勢に移行したようだがそれもまだ完璧でない上に、物資を送る手段が船しかないのだ。輸送機もあるがそんな量を輸送することができないのもつばら負傷者の後送に使われている。陸路での輸送に頼っているため物資の到着に時間がかかっているのが現状だ。

また高速爆撃機型怪異の出現も前線に打撃を与えた。これは海軍によって撃破されたようだ。この時提出された戦闘報告書にあった「怪異の核<sup>コア</sup>」という記載に目を付けた陸軍は反攻作戦を行うことにした。本土から送り込まれた増援ともとからウラル方面に配備された人員併せて15000人。そして新開発の陸戦型ストライカーを投入するものであった。作戦が行われたのは7月1日だったが、開始から6日で潰走するという負けも負けそれも大負けという有様であった。14日には航空歩兵隊の奮戦によって一時的に戦線の再構築に成功したが被害は甚大で投入された人員の3分の1にあたる5000人もの将兵を失っていた。大幅に後退した前線や以前より悪化した状況を鑑みて大陸に居住する皇国民の大規模な避難が開始さ



れることになった。幸いにも怪異の活動は小康状態になっていたため避難は順調に進んでいた。

しかし前線では地獄のような撤退戦が繰り広げられていた。撤退戦の中孤立無援となった陸戦ウィッチの救助のため出撃することが少なくなつて来ていた。炊事兵として救助された陸戦ウィッチにおにぎりや豚汁を与えることもあつた。頭を下げ「このご恩は必ず返します」と言つてたウィッチがいたが名前を聞きそびれた。

ウラルに派遣されてから2度目になる7月末自分は基地の物資をトラックに積み込んでいた。大陸からの撤退に伴い今いる基地からさらに後方の基地へと撤退するのだ。一度に撤退するのではなく3次に分けて撤退する計画になつていた。自分は3次で撤退することにしてた。ウィッチ隊は怪異の大群が観測されたようで全員出撃している。予定では撤退先の基地で他の飛行戦隊と合流する。しかし、戦闘でストライカーが損傷し基地にたどり着けないかもしれないという事態を想定し整備や補給ができるように最低限の燃料や部品、武器弾薬そして人員が基地に残っていた。

「伊勢崎兵長、大鍋はどのトラックに積みればいいのでしょうか？」  
大鍋が入っているらしき木箱を抱えているのは4月に配属されたばかりの須加整備兵だ。身長は160センチ前半で髪を一つにまとめ肩甲骨あたりまで垂らしている。格納庫の周りには10輦程トラックが並んでいた。

「右から2番目に積んどいて。後は何が残っている？」  
手元のリストにチェックを入れながら尋ねる。

「これで最後だったと思います。ここに来るまでに武器庫に弾薬と銃器が残っていたのを見ましたけど」

「じゃあ、それを積んじやおう。スペースがあるなら乗るだろ」

「分かりました。そういうえば聞きましたか？数日程前にここから20キロほどのところに怪異が落ちたらしいですよ」

辺りをキョロキョロと見て周囲に聞こえないような小声で話しかけてくる

「それまた厄介な。つかどこで聞いてきたんだよ」

「今朝軍曹たちが話しているのを小耳にはさんだんです。何でも落ちた跡らしいクレーターの周囲に大きな穴が開いていたみたいですよ」

「破片でも飛び散ったんじゃないか？怪異関連で俺が穴拭少尉に聞いた話だと、色んな所で飛行型が基地から一定の距離を置いて出現するってのは聞いたことあるけどなあ」

「何を考えてるんでしょうかね？一体」

「それがわかりや誰も苦労しねえだろうよ。わかってたら今頃こうやってトラックに荷物を積んでなかったらうに」

「それもそうですよね」

「“コア”を壊しやあ怪異が撃破できるってのはわかるがよ、怪異の全部が全部コア持つてるわけじゃねえ。もうちよい上が賢けりや良かったよ。そういや並べてある燃料の入ったドラム缶はどうすんだ？」

「撤退先の基地に持ってくみたいですよ」

「これを積み込むのかよ!?そいつはきつい話だな。中身を瓶にでも詰めて火炎瓶でも作ってやろうか」

「そういつて木箱に詰められた一升瓶を指差す。」

「それはいいかもしれないですね。ほんとに使うことがあったらおしまいでしょう」

「そいつは言ってるな。何しろ今の基地の防御力はないに近いしな」

「そういつて基地の対空機銃にチラツと目線を向ける。撤退に伴い以前配備されていた対空機銃の半分以上は戦線の別の場所に配備され、警備中隊も前線へ補充として送られていた。よって怪異の攻撃には丸裸に近い状態であった。」

「まあ、ちやつちやと片づけちゃまってここからおさらば・・・」

だと続けようとした時砲声が轟いた。須加整備兵の頭を押さえつけるようにして伏せさせる。幸いにも基地の建物には被弾しなかったが滑走路の端に着弾したようだ。爆弾はすべて第一陣と共に撤退先へと持つていかれたはずだし、滑走路の端に置いてあるという話も聞いたことがない。考えられるのは一つだけであった。

「なんてこった、怪異の奴ら穴を掘ってここまで来やがった：：!!」  
「そんな、前線からここまで大分距離がありますよ!!」

「前線から来たんじゃないやねえ!!数日前に落ちた怪異が腹の中に地上型抱えてやがったんだ。クレーターの近くの穴は怪異が地下に潜ったからできたんだよ!!」

そう話している間にも砲撃は続いており基地の建物にも着弾し始めていた。怒号や叫び声が響き渡っていた。頼みの綱であるウィッチは全て出払ってしまっている。対空機銃で反撃をしている者もいるようだが大半のものは突然のことに対処できていなかった。

「他にも基地があるはずですよ!!よりによってなんでこの基地が襲撃されるんですかあ!!」

泣きながら須加整備兵がそう言っている。これは想像でしかないが、おそらく怪異はそれぞれの航空歩兵隊基地からある程度決まった距離をおいて出現し攻撃してくるまでの速さでどの基地が脅威かを決めて、その結果この基地が一番の脅威と判定されたのではないだろうか。しかし、今はそれは重要ではない。とにかく動かねば。

ほふく前進で積み上げられていた木箱へと近づきそつと腰の雑囊から双眼鏡を取り出し砲撃している場所を探す。砲撃は基地付近の丘から行われていた。距離があり双眼鏡を通してでも若干ぼやけて見える。丸みを帯びた砲塔らしきものが4本足の胴体に乗っているものが1、随伴歩兵役であろう歩兵型怪異が十数体程確認できた。急いで頭を下げる。

「武器庫は空いていたか須加整備兵!!」  
爆発音に負けずに怒鳴るように尋ねる。

「あ、空いてましたけど怪異と戦うつもりですか!？」

「やるしかないだろ!!お前はとつとトラックに乗って逃げろ!!」  
そういつて武器庫へと駆け出す。途中でトラックに向かって逃げている兵士を見かけた。無事にたどり着いてほしいものだ。兵舎などは砲撃によって半壊していたが武器庫は無事だった。中に入り棚に置かれていた三十八式歩兵銃を手に取り弾薬箱から5発1セットにまとめられたクリップを12個取り出す。これを身体の正面に来る弾薬箱に左右30発ずつ、後ろの弾薬入れに60発入れ革ベルトに通す。これに銃剣も忘れず通しておき手榴弾もいくらか拝借しておく。革ベルトを装着し終わり立ち上がりとした時武器庫の片隅に置いてある全長2メートルはあろうかという九七式自動砲が置いてあるのが目に入った。試しに持つてみるが両手で持つことができないう程重かった。仕方ないので担ぐようにして持ち上げる。ついでに近くにあった弾薬箱も持つていく。動くのがやつとの重量だろうが興奮しているからか苦ではなかった。砲撃によって崩れた建物のがれきに身を屈める。機銃音がどこから聞こえているので反撃しているようだ。隠れたところには先客がいた。ハンチング帽をかぶりカメラを手にしている女性がいた。ハンチング帽からは犬の耳がズボンからは尻尾が見えた。

「あら、やる気満々の格好じゃない」

「こんな状況で失礼ですが、あなたは？」

「皇都新聞特派員の宮内よ。元ウィッチだったから軍相手に取材しやすいだろうって編集長の指示でウラルに送られてやつと前線から離れたと思ったとたんこのざまよ。ホントについてないわ」

「それはいいんですけど、トラックはどうなりました？」

「運よく砲撃されずに何輛かは逃げれてたわよ。」

「それは良かった。何で残ったんですか？とつとと逃げればよかったのに」

「恥ずかしい話、目の前でトラックが出ていっちゃってね。仕方ないからここで隠れてたら伊勢崎君、君が来たわけよ」

「良く名前を知ってますね。新聞には数度しか載ったことないはず

なんですかね」

「本土の方じやかなり有名だよ。前線にて航空歩兵を支える男性炊事兵」って言った具合にね。かなりの部数が売れたみたいだよ」

「そうですかそいつはいいで・・・」

自分達が隠れている場所の近くに着弾したようでも巻き上げられた土が口の中に入る。小さい砂利も頭にぶつかる。ヘルメットが欲しいところだがあいにくなくなってしまったので代わりに手ぬぐいを頭に巻いておく。

「どれだけの人間が反撃を？」

「ほとんどの人は逃げるだけだったわ。機銃はかなりやられたみたいであそこの一門が多分最後ね」

そういつて宮内さんが機銃を指差した時着弾したのが見えた。

「他には？」

「私が見た限りあなただけよ。あまりにも急なことでみんな対応できなかつたみたい。警備中隊は前線に送られてしまったみたいだしね。とりあえず援軍を呼びましょう」

「なら自分が行きますよ。それに怪異はここから800メートル離れてます。応援を呼ぶ時間はあるでしょう。問題はいつ来るかですがね。では自動砲を頼みます」

担いでいた自動砲を預け、戦隊本部に設置してある無線機まで走る。通信室は無事で電信機も無線機も使えそうだった。置いてあったヘッドセットを装着し無線機のスイッチを入れる。

「発！緊急で付近の展開可能な全部隊に告ぐ！飛行第一戦隊基地は怪異後方奇襲部隊の攻撃を受け被害甚大！状況『全展開可能部隊による支援』！我第一飛行戦隊所属伊勢崎兵長！この基地に留まり増援到着までの時間を稼ぐ！」

もう一度繰り返し返そうとしたとき再び着弾がありヘッドセットからノイズが聞こえてきた。周波数を変えても聞こえるのはノイズばかりであった。おそらく先程の攻撃で無線機のアンテナを吹き飛ばされたのだろう。ここも攻撃される可能性がないとは言えないので宮

内さんのもとへと戻ることにする。

引き返そうと廊下に出たとき廊下の角から手がのぞいているのが見えた。近づくのと仰向けになっており上半身ががれきからはみ出していた。声をかけながらがれきから引きずり出そうと脇から手を入れ引つ張る。引つ張った時間こえたのは粘り気のあるズルツという音であった。自分が引つ張ったのは上半身だけだった。がれきの重みでつぶされたであろう下半身とつながっていたであろう箇所から腸らしきものが伸びているのが分かった。胃からすっぱいものがこみあげ嘔吐する。胃の中身がなくなっても数度嘔吐した。

フラフラと立ち上がり元のガレキへと隠れる。宮内さんは自分の顔を見て察してみたのだが、それについて何も言わなかった。再び雑嚢から双眼鏡を取り出し怪異の動きを探る。先程よりかなり近づいてきており人型の細部まで分かった。球体の関節を持った黒色のボディはどこかデッサン人形を連想させた。

「だいたい500メートルほど手前まで来ましたね」

「作戦は何か考えてあるの?」

「作戦立案とかやったことないんでわかんないんすよ。とりあえず狙撃は自分がするんで観測手お願いしますよ。双眼鏡は貸します。300メートルまで引き付けて人型に2発ほど撃ったら場所を変えましょう。」

「まあ、こんな状況だもの文句は言ってられないわね。それでいきましよう。戦車型は?」

「歩兵型を優先でいきます。歩兵型さえ潰せれば機会を作りやすくなります」

隠れていたがれきの山から這い出し地面に自動砲を設置する。草が伸びており若干視界が制限されるがすぐ移動するので気にしない。弾倉を取り付けセイフティーを外す。心臓が痛いほど脈打っている。喉が異常に乾いて何度もつばを飲み込む。

「今どのくらいの距離まで近づいてきましたか?」

「350つてところね。まだ気づかれてないわ」

「了解、300に入ったら教えてください」

汗が額を濡らす。照準を戦闘の人型の胴体に向ける。少しづつであるが肉眼で分かる距離まで近づいてきていた。

「300に入った!!」

深呼吸をし息を吐きだすとともに引き金を絞るような感覚で撃つ。轟音と共に20ミリ弾が放たれ強烈な反動が肩に訪れる。20ミリ弾は胴体に命中したようで真っ白な雪のように砕け散る。怪異はこちらに気が付いていなかったようで周囲を警戒していた。続けて一体目の後方にいた個体を撃つ。これは肩にあつたようだが同じく砕け散った。しかし、マズルフラッシュを見られたようで人型が発砲してきた。戦車型に攻撃される前に自動砲を担いで別のガレキへと隠れる。ガレキに背を預けるようにして少し休む。

チラツと顔を出して怪異の様子を伺うとこちらへ近づいてきている。数を数えると10体ほどいた。戦車型も砲塔を動かして周囲を警戒している。何とかして歩兵型と引き離さなければ勝ち目はないだろう。その時、陸戦ウィッチと話した時のことが思い出された。彼女ら曰く地上型を狩る際に足を破壊して動きを止める時があるとのことだった。少しでも戦车型的の動きを止めることができれば歩兵型との戦闘に集中できるようになるだろう。分が悪い賭けかもしれないが今はこれにかけるしか方法がない。

「ちよつと今から戦车型的の足を狙撃しますわ」

「それはいくら何でも無茶があるんじゃない?」

「奴の動きを止めることができれば歩兵型との戦闘に集中できるようになるかもしれません。それに時間稼ぎだとしても数を減らせる」

「今の状況を考えるとそれしか方法がないわね。で、私はどうしたら?」

「自分はここに残りますから、合図と共に宮内さんは本部まで後退してください」

「大丈夫なの?あなたが一番危険じゃない!」

「自分は簡単には死にませんよ。しぶといことには自信があります」

からね。それじゃあ、行きますよ」

ガレキから這いずり出て戦車型を正面に捉え4本脚の正面から見て左側を狙う。こちら側に向かってきているため狙いをつけやすかった。

「3…2…1…今です!!」

脚部の付け根に命中し、グラリと戦車型はバランスを崩す。歩兵型が援護のために発砲し耳元でカザキリ音が聞こえるがかまわずに二発目を同じく左側の後方に撃ちこむ。4本の内片側の2本をズシンという音と共に地面に倒れこむ戦車型。思わず向こうにいたときよく見ていたアクション映画に出ていたスキンヘッドの刑事のセリフを叫んでいた。

「yippe yiea, mother fucker!!」

ついでに歩兵型にもサービスと3発ほど撃ちこんでおく。もう一発撃とうとしたが弾倉が空なので再度ガレキの山へと引込み弾薬箱から一発ずつ取り出しを弾倉に装填していく。もう一撃でもと攻撃しようとしたときふとガレキの山の違和感に気が付いた。頂上部分に人影があるのだ。とっさに腰をひねり自動砲を人影に向ける。歩兵型が銃らしいものを構えて自分を撃とうとしているところであつた。

「こんの、ヤロウツ…!!」

もう少し気が付くのが遅ければやられていただろう。自分の放つた20ミリは歩兵型の頭を吹っ飛ばした。しかし歩兵型の攻撃もまた自分の肩部をかすっていた。白く砕けた破片が口の中に入ったが気にしてはられない。コンバットハイ状態になっているのか痛みを感じることはなかった。自動砲を地面に置き革ベルトにつけていた手榴弾の安全ピンを抜きガレキに手榴弾の先端をぶつけ投擲準備を済ます。歩兵型が迫つて来ているであろう方向に向かって投げる。爆発音が聞こえたが有効だったかどうかはわからない。どれだけ数が減ったかわからないがこのままここにいてもどうしようもないだろう。自動砲を担ぎ上げ本部の方まで後退する。発砲音が聞こえたが幸運にも被弾することなく砲撃によって出来た穴から中へと滑り



込む事が出来た。近くの部屋に入って外を見ると自分を追って歩兵型が本部まで近づいてきていた。

傷つき酷使された身体が酸素を求める。しかし、いくら吸い込んでもゼイゼイという荒い呼吸が落ち着くことがなく呼吸すればするほど苦しくなってきた。更に体を動かさそうしたが非常に重く感じられた。廊下を何かが歩いている音が聞こえ自分の部屋のドアノブに手をかけるのが分かった。何とか体を動かし自動砲の銃口をドアへと向ける。怪異なら一人でも多い方がいい。ドアを開けて入ってきたのは歩兵型ではなく宮内さんであった。武器庫から持ってきたのかカールスラント製の短機関銃MP18を手にしていた。自動砲を構えていた自分に一瞬驚いたようだが肩口から血を流しているのに気が付いて急いで近寄ってきた。

「あなた肩から血が出ているじゃない!!早く手当しなきゃ!」

そういつて所持していたガーゼと包帯で応急処置を施される。痛みがなかったので大丈夫だと思っていたのは自分だけであつたようだ。

「戦車型の動きは止めました。あとは歩兵型だけです」

ゼイゼイと鳴っている喉から何とか声を絞り出して伝える。

「大丈夫なの!まさか瘴気にでもやられたの!」

新兵教育の時に座学で怪異は瘴気を発するということを学んだ気がするが完璧に忘れていた。そうかこれが瘴気にやられたということなのだろうか。まだ動けるだけよしとしておこう。

「まだやれますよ。それにここなら正面からでも歩兵型を迎え撃てる」

自動砲を置いて三十八式を手にする。ボルトを引いて6・5ミリ弾を薬室に送り込む。頼りないが近距離で撃ちこめば効果はあるだろう。頭を少しだけ出して様子をうかがうと50メートル手前まで歩兵型が来ていた。殺られる前に殺らなければ。窓枠に三十八式を委託して先頭の一体の頭部を撃つ。

吸い込まれるように頭部に6・5ミリ弾は向かっていき歩兵型を白い破片にした。歩兵型なら小銃程度でも破壊できるのが分かった。

残りがこちらへ銃口を向け発砲しているがかまわず発砲していく。2体、3体と続けざまに倒していくが猛烈な反撃のため頭を下げざるをえなかった。床にはいつくばって歩兵型の攻撃がやむのを待つ。銃声が止んだ時壁は当然のように穴だらけになっていた。

「いきなり撃つなんて!!もう少しやり方があったでしょう!？」

「もうこれ以上下がる場所はないんだ!!増援がいつ来るかも分からん!!」

そう言いあっていると窓枠がきしむ音が聞こえた。銃剣を鞘から取り出し右手に握る。上を見上げると窓枠を黒い指が掴んでいた。おそらく自分たちの死亡確認をしに来たのだろう。歩兵型が窓枠を乗り越えようとするために足をかけたのを見計らい自分たちがいる方へと頭を掴み自分たちのいる方へと床にたたきつけ引きずりこみ胸部の真ん中に銃剣を振り下ろすようにして突き刺す。気が付いたら体が動いていた。宮内さんの方に目をやるとまるで別人を見るかのような目で自分を見ていた。今はそんなことを気にしている時ではない。残りの手榴弾を外へ放り投げておく。

「すいません、短機関銃借りますね。予備弾倉もあるならそれも」

「あ、はい」

そういつて宮内さんの持っていたMP18を借りる。予備弾倉は革ベルトに差し込み窓から飛び出す。外にはまだ五体ほどの歩兵型が残っていた。破壊されたトラックまで撃ちまくりながら移動する。途中戦車型からの砲撃があつたが、片側の脚2本を失ったことよつて大きく左側へと傾いているため照砲撃の精度がかなり落ちてきているようだ。格納庫の陰に隠れ銃だけ外に出し再度撃ちまくる。弾倉には20発しか入っていないのですぐに撃ち尽くしてしまう。チラツと頭をのぞかせて様子を見ようとしたが頬を銃弾が掠めていったので慌てて頭を引っ込めた。弾倉が心もとないたため何か武器になりそうなものを探すと燃料が入っているドラム缶が並んでいるのが目に入った。

どうやら被弾を免れたようだ。近くには横になっている木箱から飛び出したのか数本ほど転がっている一升瓶があつた。這いずりな

がらドラム缶へと近づいていきドラム缶へ銃剣を突き刺した。あけた穴へと一升瓶の口を近づけ燃料を入れていく。瓶いっぱいになったところで軍服を切り裂いて瓶に突っ込んで栓にする。雑嚢を探つてマッチを探し栓替わりの布へと火をつけた。

「よお、旦那!!」

注意を引くようにわざと大声をあげ歩兵型へと火炎瓶を大きく振りかぶって投げつけた。火炎瓶は歩兵型へと当たり割れた瓶から飛び散った燃料が燃え広がり歩兵型の一体を包み込んだ。こちらへと一体が発砲しようと、もう一体が殴ってこようとしてきたがMP―18の銃口を顎へと押し付け発砲する。背後で発砲しようとしていた歩兵型の片足を撃ちバランスを崩させる。歩兵型は地面に倒れこんだものの自分を撃とうとしてきたので持っていた銃を蹴り上げそのまま頭部を踏み潰した。自分を苦しめていた息苦しきなどは気にならなくなっていた。全身の感覚が研ぎ澄まされ、ただただ本能のままに戦っていた。

そしていつ死んでもおかしくない状況に充足感を得ている自分がいた。怪異が白い破片となって砕けていくのを見るたびに全身が言いたいようなない高揚感に包まれていた。まだ残っている2体を格納庫の中へと誘い込む。ストライカーの部品が入っている木箱の山の中で身を潜めて歩兵型が姿を現すのを待つ。

しばらく待っていると歩兵型が入ってきた。木箱の山の中にいる自分に気づかず目の前を通り過ぎようとした一体に組みつき歩兵型の持つている銃を脇に挟み込む。力をかけつつ銃口がもう一体へと向くように体を動かしていき引き金へと指をかけていく。引き金に指をかけた時卵のような歩兵型の顔に恐怖が浮かんでいるような気がしたが気にせず引き金へとかけた指へと力を込めた。発射された銃弾は何発かそれたようだが確実に歩兵型を破片に変えた。

「パンにはパンを、血には血をだ」

そう言いながらポケットナイフを雑嚢から取り出して歩兵型ののど元へと突き刺し破片にする。カランと音を立て落ちたナイフを拾い雑嚢へとしまいなおす。残った大物でも仕留めようとしたとき地

面が大きく揺れ連続した砲声が聞こえてきた。

「面白いじゃねえか、あの野郎」

起き上がり全速力で武器庫へと向かう。途中戦車型を見るとこちらへと砲口を向けていた。

「ヤベエツ・・・!!」

身を投げ出し頭を手で守る。弾は自分の上を抜けていったことが風圧で感じられた。草むらの中へ着地できたことにより戦車型の攻撃を避けることができた。蛇のように草むらの中を這って武器庫へと向かっていく。武器庫には試験的に導入された集束手榴弾と梱包爆薬があるはずだ。自動砲でもいいが確実性なら爆発物の方がいいだろう。集束手榴弾と梱包爆薬を手にして戦車型のもとへと走り出す。

砲撃はあったもののジグザグと動きながら近づいているためか当たることはなかった。戦車型との距離が100メートルを切ったところで急に足に力が入らなくなり動きを止めてしまった。痛みはなかったが体に相当負担がかかっていたのだろう。このチャンスを逃すまいと戦車型が目の前の地面に砲撃を行う。

巻き上げられた土砂が降りかかる。動けつてんだこのポンコツ!!と全身に力を籠める。絶叫に近い声をあげ戦車型へと近づいていく。戦車型は砲撃をしようとするも砲身を持ち上げることができる限界まで持ち上げていたので胴体の後部へと近づいていた自分を撃つことはできなかった。酷使したせいで今に止まってしまいそうな足を引きずりながら近づいていく。多分今の自分は笑顔を浮かべているだろう。それもとびつきりの笑顔を。

「よくもてこずらせやがって。でも、これでおしまいだ」

4本の脚の内2本を失ってもなお動こうとしている戦車型に梱包爆薬の導火線に火をつけ砲塔らしい部位へと爆薬を放り投げる。身体にムチ打つようにして走って戦車型から走って遠ざかる。しばらく

くしてから轟音が響き戦車型がいたあたりに雪のような破片が舞い散っていた。それを見て今までこらえていたものがあふれ出してきた。体のあちこちが痛みを訴え、目もかすみ始めていた。本部の方から宮内さんがかけてくるのが見えた。立ち上がって宮内さんのもとへと行こうとしたとき何か落下する音が聞こえ轟音に包まれた。

気が付けばあおむけに倒れ空を見ていた。ひどい耳鳴りがする。身体の左側が燃えるように熱かった。空には黒い鳥のようなものが旋回していたどうやら航空型怪異が爆撃をし巻き込まれたようだ。動かそうとするも一向に動く気配がない。

右腕を顔のあたりまで待ちあげるのが震えていた。咳き込み右手で何とか口を覆う。右手にはベツトリと血が付いていた。浅い呼吸しかできない。それにどうしようもなく眠かった。所々煙を上げている地上とは違い空は真っ青だった。増援のウィッチ達が到着したのだろう飛行機雲が引かれそれを覆うように雪のような怪異の破片が降っていた。その時ウィッチが飛んでいるのを初めて見た時の事を思い出した。その時には眠気をこらえるのが限界だった。寝よう、少し寝れば動けるようになっていくはずだ。そう思いながら瞼を閉じたのが最後だった。

## 6話 死から逃れしもの

暗い、とても暗い。あたりをいくら見渡しても光が見えない。一体いつからここにいるのだろう。胸まである粘つく液体の中をもがくように進んでいく。頬をなでる感触があり風が吹いているのが分かった。しかし、拭いている風の音がまるで多くの人が嘆き悲しみ、そして許しや助けを乞うているかのように聞こえた。頭を振り自分に気のせいだと言いつつ聞かせ前へ、前へと進んでいく。粘つく液体は容赦なく体力を奪ってくる。もはや気力だけで進んでいた。なぜかわからないが立ち止まってしまえばそこで終わりのような気がした。しかし、その思いに反して液体はどんどん深さを増していき、脚が付かない深さまでになった。必死に息を吸おうと立ち泳ぎで顔を水面へと出す。しかし、気力で支えていた体だったがそれで限界を迎えたようでズブズブと沈んでいく。思考がぼんやりとしてくる。

その時誰かが自分を呼んでいるような気がした。鼻や口から粘性の液体が容赦なく入ってくるが、それでもあがいて再び水面を目指す。死に物狂いで両腕を掻き足を動かす。やっとの思いで水面から顔を出すと多くの黒い腕が生えていた。黒い腕たちはもう一度自分を水面に沈めようとするかのように押さえつけてきた。必死の抵抗をしていると白く輝いた腕が掴めと言わんばかりに垂れ下がっていた。顔が半分まで沈められていたが腕だけを伸ばし白く輝いた手を掴んだ。今まで暗闇だった周囲が光に包まれそして…。

「先生!!患者が目を覚ましました!!」

あの戦闘から1週間後自分は目を覚ました。

自分が八月初旬に海軍病院の病室で目を覚ましてからはや一週間

が過ぎていた。医者によると、あの戦闘の後到着した航空ウィッチに  
よって発見されたとき自分は半分死体も同然の状態だったらしい。  
後方で応急処置を施され浦塩から病院船によって本土まで搬送され  
たらしいがかなり危険な状態が続いており、病院船や海軍病院で大  
手術を何度か受けやると安定した状態になったようだ。目覚めてし  
ばらくは手すりを使わないと歩くことができなかつたが、今は手すり  
なしで歩くことができるようになっていた。ベットから、起き上がり病  
室備え付けの洗面所へと向かう。洗面台の鏡に映っている自分は、顔  
の左側が包帯に覆われている状態であつた。左腕を鏡へとかざす。  
その左腕は顔と同じように包帯によつて覆われていた。上着を脱ぎ  
腕や顔にまかれている包帯を外していく。全ての包帯を外した時鏡  
に映し出されたのは左頬から左腕全体にかけて深い火傷を負つて  
いる姿であつた。また光の加減なのかわからないが左目が若干赤く  
なつていた。

医師の診察によると2カ月ほど安静にしておく必要があるようだ。  
左手を開いたり、閉じたりしてみるがその動きは弱々しいものであり  
皮膚が引つ張られる感触があり思わず顔をしかめる。その時ドアが  
ノックされる音が聞こえてきた。もし看護師に包帯をほどいている  
のを見られてしまうと説教されてしまうので慣れた手つきで包帯を  
巻きなおしてドアのもとへと歩いていく。

「待たせてしまつてすみませんね。何分歩きづらいもので」  
そう言いながらドアを開けると先生と美緒ちゃんたちが立ってい  
た。美緒ちゃんの手にはお見舞いの品であろう果物が入つた籠が握  
られていた。若ちゃんその両手で抱えている盆栽はやめなさい。縁  
起悪いでしょうが。

「面会が許可されたらしいと聞いてやってきたんだ。今回の件は、  
何と言つたらいいかわからないけど君が無事でよかつたよ」

先生がチラリと左腕に視線をやって声をかけてきた。

「ありがとうございます。立ち話は何ですし中に入ってください」

先生たちの中に入ってもらい自分はベットへと腰掛た。改めて美緒ちゃんたちを見ると涙ぐんでいた。

「どうした美緒ちゃん、なんか嫌なことでもあったんか？」

「違います。正さんが生きててくれたことがうれしくて。顔を見ただけでなんだか涙が止まらないんです。止めようとすればするほど流れてきて・・・」

美緒ちゃんの言葉は嗚咽にかき消されていった。醇ちゃんは泣きに泣いているが、若ちゃんは泣くまいとしているようだが鼻が赤くなっているのが見てとれた。

「大丈夫、大丈夫だから。俺は簡単に死んだりはせえへんよ」

自分はそう言つて美緒ちゃんの頭をなでることしかできなかった。

もう一週間を検査などで海軍病院で過ごし福知山にある陸軍病院でリハビリを受ける事になった。カレンダーを見ればもうはや八月ももう一週間で終わる日付をさしていた。負傷に関しては医者も驚くほどの回復スピードで治ってきてはいたが火傷の痕が引つ張られるような感覚はいまだに続いていた。

舞鶴にいたときは美緒ちゃんたちが毎日とっていいほど見舞いに来てくれたが先生が顔を見せることはなかった。福知山に移つてからは、フジ少尉やヒガシ少尉と智子さんそれに江藤中佐が数回見舞いに来たくらいだった。ヒガシ少尉や智子さんに久しぶりに会った時、美緒ちゃんと同じように大泣きされた。フジ少尉は少し泣いていたくらいだったが、江藤中佐が自分の姿を見るなり静かに涙を流したのは驚いた。

リハビリはなかなかきつかったが足の方は少し痛むくらいだったので病院内を自由に移動していた。特に病院の中庭はお気に入りので昼寝場所であった。木陰があり、夏の日光から隠れることができたか



らだ。いつものように木陰で昼寝をしていると誰かがこちらに向かってくるのが足音で分かった。足音が聞こえるが2つとも微妙に違っていることから2人ほどだと推測できた。目覚めてから気配や音に敏感になってしまったようだ。何とか慣れてきたが、目覚めた当初は今までの感覚との違いに体が慣れず嘔吐してしまった。うつすらと目を開け音の方を見ると看護師と担当医がやってきた。のっそりと体を起こす。若干の眠気が残っており頭の中の靄が張っているような気がする、

「今起こそうとしたところですよ、伊勢崎さん」

「そいつはどうも先生。で、どうしたんです？」

「面会されたいという方がこられたので病室で待ってもらっています」

「誰だかわかります？」

「名刺をもらったんですが皇都新聞の方らしいです。確か名前が宮内だったと」

宮内さんか無事だったようで何よりだ。病室へと戻りドアを開けると宮内さんが椅子に座っていた。頬に絆創膏が張ってあったがそれ以外のけがは無い様で何よりだった。

「この前は助かったわ、君のおかげで生きて帰ることができたありがとう。失礼だが怪我の様子はどうか？」

申し訳なさそうに包帯を指さしている宮内さん。

「何とか治ってきてますよ。それでどうやってここを知ったんです？」

「君の上官の江藤中佐殿は私の後輩だからね、そこ経由で教えてもらったのよ」

意外なところでつながりがあるもんだと思っていると宮内さんが新聞を投げてよこしてきた。一面の内容を見て思わず目を見開いてしまった。

『『ウラルの鬼神奮闘す』っていったい何のことですか？それに何で俺

の写真が!？」

「あとで教えるから記事も読んでくれないか？」

記事を要約すると以下になる。

『7月下旬航空歩兵基地が怪異の奇襲を受けた。警備中隊が壊滅する中、伊勢崎兵長の鬼神の如き活躍によって戦車型怪異一個小隊、歩兵型怪異2個小隊の撃滅に成功した。この功績によって伊勢崎兵長は昇進が決定した。』

「どうだった？」

「この記事は何なんです!?怪異はこの記事に書いているような数はいなかった!!これじゃあただの誇張じゃないか!!」

新聞をベットへ投げつけ大声で叫ぶ、激しく動いたせいかわ腹部の傷から痛みが生じうずくまる。

「仕方ない。陸軍の上の方からそういう記事にするように圧力をかけられたんだからな。写真を撮ったのは私だけど記事を書いたのは別の記者よ」

「いててて…。一体なんでそんなことを？」

「あの戦闘のことをそのまま書けるわけないでしょう?『警備部隊を前線に送っていたので男性隊員が戦いました』なんて記事にしてみなさい陸軍は国民からの信用を無くす上に、政治の主導権を海軍に奪われるでしょうね。それを上は避けたいからあの時の怪異の数を増やして、いないはずの警備中隊を登場させたわけ。これで味方が全滅した中一人で怪異の集団を壊滅させた英雄の誕生よ。陸軍には英雄が必要なのだ」

「それでもこれはいくら何でもないでしょう…」

自分はただ新聞の写真に目を落としそうつぶやく。そのつぶやきは、部屋に吹き込んできた風にかき消され病室にいる誰の耳にも入る

ことはなかった。

8月31日扶桑海を侵攻している大型怪異通称『山』を撃滅するため陸海軍による共同作戦『隼』が開始された。艦隊を怪異への囮とし、多数の小型怪異の注意を引き手薄となった大型怪異を少数精鋭の魔女部隊ウィッチによって攻撃するという作戦であった。海軍からの反対があつたもののそれは数名の少女に皇国の命運を託すことへの抵抗感や不安が含まれていたからであつた。

様々な不安要素を抱えた『隼』作戦であつたが艦隊や魔女隊の奮闘によつて成功した。特に智子さんは大型怪異を破壊するという功績を打ちたてた。後に智子さん主演で『扶桑海の閃光』という映画が公開され爆発的なヒットをしたようだ。自分もちよつとした端役で出させてもらつたりする。この映画が作られたのは多大な消耗を強いられたウィッチの補充のため公開されたプロパガンダ映画なのだがお口にミツフィーちゃんしておくことにしよう。

智子さんとフジ少尉は研究員として明野飛行学校へと戻つた。ヒガシ少尉は式典の際に無茶な曲芸飛行をしてしまい生死をさまようような大怪我を負つてしまった。幸いにも治癒魔法が使えるウィッチのおかげで一命をとりとめることができたが、見舞いに行つたときにしていた表情は忘れることはできない。自分は半年ほどリハビリのため病院通いを続けていたが年明けには明野飛行学校へ伍長へと昇進して復帰した。

美緒ちゃんと若ちゃんは欧州へと遣欧艦隊の一員として派遣され、醇ちゃんは軍学校へ進学することになったようだ。地球の反対側だが美緒ちゃんと若ちゃんなら元気にやっていけるだろう。

―死者延べ8207人 民間人を除く戦傷者延べ12051人―  
大本営『扶桑海軍変報告書』より抜粋

舞鶴で戦端が開かれてより1年以上の長きにわたる戦いを戦い抜き、皇国大陸領の大半と数多くの兵士の犠牲と引き換えに、何とか勝利したこの戦役は後に“扶桑海軍変”として人々の心や歴史に記録されていくことになる。その記憶と共に“扶桑海の巴御前”そして“ウラルの鬼神”の名が人々の中に刻まれていった。

時がたち1939年10月明野飛行場近くの喫茶店では一人の女性が開店に向けての準備を行っていた。その女性は軍を退役した江藤敏子であった。彼女は軍を退役したのちに加藤武子から教わったコーヒーを売りに喫茶店を開業したのだ。

開店当初は客がちらほらと訪れる程度であったが、『扶桑海の閃光』の大ヒットもあり“扶桑海の巴御前”御用達の店として女学生達に人気の店として繁盛していた。開店に向けてコーヒーを挽いていた。その時喫茶店のドアが開き、つけられていたベルが店内に鳴り響いた。顔を上げるとソフト帽を目深にかぶったスーツ姿の男性が立っていた。普段男性が喫茶店を訪れることはなく、あったとしてもカッブルで来店することがほとんどであった。珍しいこともあるものだと思いますながら男性へと声をかけた。

「すみません、まだ開店時間じゃないんですよ」

「いえ、久しぶりにお顔を拝見しに来ただけです。すぐに出ますよ

江藤 “中佐”」

そう言つてその人物はソフト帽を取り踵を打ち鳴らし敬礼をする。ソフト帽を取つた人物の顔を見て敏子は目を見開いた。伊勢崎正が立っていたからだ。顔の左側には痛々しい火傷の跡がいまだに残つており左目は若干赤みを帯びていた。

「久しぶりじゃないか、どうだい一杯飲んでいかないかい？ すぐに入れるよ」

そう言つて席に座るように促す。

「お願いします」

正が座つたのを見てから慣れた手つきでコーヒーを入れていく。その間正は店内を見渡していた。店内は落ち着いた雰囲気かなり居心地が良かった。見渡していると店の一角に飾られた写真に視線がひきつけられた。第一飛行戦隊が結成されたときに撮影したものだ。自信満々に『豪勇穴拭』と書かれたマフラーを見せている智子と苦笑いしながらそれを見ている武子。圭子と敏子は笑顔でそして正は引きつった笑いを浮かべているといったモノであつた。

「懐かしいなあ、あれから一年ほどか」

「ええ、早いものですね。時間つてもものは残酷なもんです」

コーヒーをすすりながらそう答える正。

「そうだなだからこそ時間は大切なものさ。それに今日はただ顔を出しに来たわけではないだろう？」

「ばれましたか」

「ばれるも何も穴拭やフジの奴はたまに顔を出しに来るのにお前は顔を出さなかつたからな。それで何かあつたんだろうと思つたままでさ」

「やっぱり頭が上がりませんね。欧州の事情についてはご存じで？」

「もちろん知ってる」

欧州では怪異が発生し本格的な戦闘状態になつていた。カールスラントはオストマルクとの間に非常防衛体制を敷き必死の防衛線を

行っていた。

「欧州に扶桑軍を派遣することになりましたね。その一員に選ばれたんですよ。もちろん正式な辞令はまだ出てませんけどね」

「やっぱりカールスラントか？」

「まさか。自分は北欧のスオムスに派遣ですよ」

「スオムス？何でそんなところに派遣を？」

「リハビリは終わったんですが、まだ完璧に治ったわけではないんですよ。そんな状態で激戦地に派遣はまずいって上は考えたんでしょうね。だから安全そうなスオムス行きですよ」

そう言つて自嘲気味に笑いながら左の袖をめくる正。相変わらず左腕はひどい火傷の跡が残っており黒く焦げているような部分さえあった。喫茶店の中を沈黙が支配する。長い時間が経つた時敏子が口を開いた。

「無事に帰って来い。帰ってきたら飲みに来なコーヒーをいくらでも飲ませてやる」

「私は簡単には死にませんよ。死ぬならとことんあがいて見せます。それに、この美味しいコーヒーをまた飲みたいですからね」

そう言つて正は席を立ち外へ出ようとドアノブへ手をかけた。その時見送るためについてきていた敏子が正へ声をかけた。

「すまない忘れ物だ」

敏子の声に振り向いた正へ敏子が唇を重ねた。突然のことに正は驚き固まってしまった。

「絶対無事に帰って来いよ。返事はその時でいいからな」

顔を赤らめながら敏子は正へと告げた。正はただただ頷くだけであつた。基地へとフラフラと歩きながら戻っていく正の背中を敏子は見えなくなっても見つめていた。

扶桑海事事変という小雨は止んだ。されども第2次ネウロイ大戦という暴風雨は近づいていた。その暴風雨がどうなるかは誰にも予測はできない。しかし分かることは一つだけ。暴風が止むまでに長い時間がかかるであろうことは誰の目にも明らかであった。

## 北欧の“いらん子”達 7話 北欧に集いし者達

1939年9月1日欧州は怪異の侵略を受けた。突如としてダキア上空に巢が形成され瞬く間にダキアは怪異に押しつぶされていった。欧州及び世界各国は人類連合を形成しダキアに出現した怪異を『ネウロイ』と呼称し、第2次ネウロイ大戦が開始された。人類連合の抵抗も虚しく東欧諸国は瞬く間に壊滅し、オラーシャ帝国も侵攻を受けた。この時運悪くオラーシャ帝国軍内では内紛が起きており対処が遅れてしまった。そのため戦線は後退していくこととなりバルトランドやスオムスへと撤退する部隊もあった。世界各国が増援を欧州へ送り込んでいる中扶桑国軍内でも欧州への派遣が決定し、派遣される人員の選抜が開始された。

秋も深まる10月リハビリを終え軍へと復帰した自分は、埠頭を離れようとしている欧州派遣艦隊の輸送船『阿波丸』の甲板上に立っていた。自分の反対側では欧州派遣の要である“機械化航空歩兵<sup>魔女</sup>”達が見事な敬礼を行い熱狂の歓呼とカメラのフラッシュを受けていた。見送りに来ている人はオリンピックの代表選手団を見に来ているようなものだろうと一人納得していた。制服のポケットをゴソゴソと漁り支給されていたタバコを啜える。マッチは一応持っているが決して火をつけはしない。あくまでも格好つけのためのタバコである。甲板上を見渡してみると敬礼を終えたウィッチ達がちちらを見てひそひそとささやきあっているのが見えた。それもそうだろう慣れたとはいえ女の中に男一人なのだから仕方ないと思ったその時横から盛大なため息が聞こえた。顔を向けると智子さんがうなだれていた。本人はカールスラントへ派遣されるものだと思っていたのが、北欧の



小国スオムスへ派遣されることとなりよほどのショックになつていくように。自分の場合は完治したわけではないので比較的安全そうなのスオムスへ回された。

「いいかげん吹っ切りましようや智子さん」

「アンタはお気楽そうでいいわよね。私たちは“小部隊”よ!!カールスラント組なんて大見出しつけられてんのに私たちはたった数行よ!?”

「仕方ないでしょうに自分も併せて二人しかいないんですから」

「たった二人で何ができるっていうのよ。だいたいスオムスなんて小国にネウロイが攻撃するわけないじゃない!!」

「いいじゃないですか巴御前と鬼神って組み合わせ。まあ何かあつてからじゃ遅いですしね?落ち着きましよう?」

怒髪衝天と言った様子の智子さんだが対照的に自分はすんなりと受け入れていた。というより上が行けと言っているので逆らつたところでもいいことはなんもないのだ。ならば受け入れるしかあるまい。

「俺は智子さんと一緒によかつたと思ひますがね。智子さんはどうですか?」

そういうと智子さんの顔が熟れたトマトのように真っ赤に染まつた。

「いやつてわけじゃないわよ。…むしろチャンスなんだけどやつぱりカールスラントに行きたかつたし」

もじもじとしながら智子さんはそう答えた後半は風にかき消されよく聞こえなかつた。そんな智子さんを横目にしてると後ろから素つ頓狂な声が聞こえた。振り返ると小柄な少女が立っていた。白いセーラ服にゴム引きのコート、錨のマークがついた帽子をかぶっている。ということは海軍だろう。彼女は顔を智子さんに近づけ食い入るように見つめた。

「やつぱり穴拭智子少尉だ!!感激です!!」

「失礼だけどあなた誰?」

「失礼しました!!皇国海軍横浜航空隊所属、迫水ハルカ一等飛行兵曹ですっ!!」

そう言つて敬礼している少女はきれいに切れ揃えられた前髪のくりくりとした黒い瞳を智子さんに向けていた。

「飛行兵曹つてことは貴女も機械化航空歩兵？」

「はい、そうです。違つた！そうであります!!」

智子さんに向けている瞳はきらきらとしている。

「実は私その、少尉の大ファンでして!!」

「あら、ありがとう」

『扶桑海の閃光』は何度も見に行きました！一機で五機の怪異に囲まれながら単機で奮戦されたシーンは大変興奮いたしました!! いかはお会いしてみたいと思つていたのですがまさか欧州派遣の戦場で会えるなんて。正に奇跡です！少尉はカールスラントへ派遣されるのですか?」

やばいよこの上官笑顔で地雷踏んできやがったよ。

「ちっ、違うわ…」

「では、どちらに？」

持ち直したようだったテンションが無垢な一撃を受けシウトウーカも真つ青な急降下を決める。

「す、スオムスよ…」

「本当ですか!?! 一緒の船ならず行先まで一緒だなんて!!」

「あなたもスオムス派遣なの？」

「はい、ご一緒出来て光栄の極みです!!」

「なら一緒に頑張りましょうね」

「はい、でも二人だけなんて不安ですね」

迫水兵曹がそう言つたとき、獲物が無防備にえさを食べているのを見つけた肉食獣の笑みを智子さんが浮かべた。

「残念二人だけじゃないわよ。ここに3人目がいるんだから」

そう言つて俺を指差す智子さん。踵を打ち鳴らし敬礼を行う。

「扶桑皇国陸軍欧州派遣スオムス方面部隊糧食担当員伊勢崎伍長であります。初めまして迫水一等飛行兵曹」

長つたららしい部隊名を言いたくないが書類上所属している部隊なので言わなければならぬ。

「伊勢崎ってあの『ウラルの鬼神』の伊勢崎兵長ですか!？」

遠巻きに自分たちを見ていたウィッチ達からも驚きの声が漏れる。

「まあ、世間ではそう呼ばれてるみたいですね…」

「とにかく3人そろえばなんとやらというでしょ？ 脱スオムスの方法でも考えるわよ!!」

この期に及んでもカールスラントへ行くことをあきらめてないよ  
うだ。

「いい加減あきらめてスオムスへ行きましょうよ…」

「あきらめるもんですか!! 絶対カールスラントへ行つてやるんだか  
ら!!」

こちらの言うことに耳を貸してくれない。

「落ち着いてください穴拭少尉。スオムスで戦果をあげればカール  
スラントへ配置転換することを上も考えてくれるかもしれませんよ。  
それに加藤少尉と一緒に戦うにしても何か自慢できることがあつた  
方がいいでしょう?」

智子さんはフジ少尉にライバル心を抱いている節がある。そこに  
付け込めれば何とかなるだろう。

「確かにそうかもしれないわね。ま、そこまで言うんなら行つてや  
ろうじゃない」

智子さんは仕方ないといった様子でそう答えた。何はともあれ何  
とかスオムスへ行くことができそうだ。

「誰が私をスオムスへ送ったかわかんないけど必ず見返してやるん  
だから!!」

船に揺られ続けること5週間、『阿波丸』はガリアのブレスト軍港へ  
入港した。カールスラント組とは別れ自分たち3人は輸送機を乗り  
継ぎ、空路でスオムスのカウハバ基地へとやってきた。カールスラン

ト製の輸送機から降りたとき目に入ったのは針葉樹林と美しい湖であった。11月とはいえ扶桑とは段違いに寒くコートを着ていても肩をすぼめる程寒かった。迫水一飛曹は寒さに震えているばかりであった。とはいえ慣れてきたようで智子さんに話しかける余裕が出てきたようだ。

「すごいですね智子さん、一面雪だらけですよ!!本当に雪って綺麗ですね!!」

頬をリンゴのように染めた迫水兵曹が嬉しそうに智子さんに言っている。しかし、肝心の智子さんは

「キューナナの魔導エンジンはこの極寒の地で性能を發揮してくれるのかしら」

と景色のことなど気にしていないようだった。迫水兵曹はガツクリと肩を落としている。船上で過ごしてきた分かってきたのだが迫水兵曹は智子さんに尊敬以上の感情を持っているようだった。まあ抱く感情など本人の自由だろう。輸送機から降ろされている物資をリスト片手にそろっているかチェックしていく。物資の大半はストライカー関連で後は個人の荷物や装備品であった。もちろん自分の銃器もリストに入れられている。

物資が漏れもなくそろっているのを確認した時、雪を掻き分けながら白の迷彩塗装が施された雪上車がやってきた。扉が開き降りてきたのは、眼鏡をかけた理知的な女の人が降りてきた。こちらへと敬礼してきたため慌てて敬礼を行う。

「カウハバ空軍基地へようこそ。基地司令部、ハツキネン大尉です」  
「扶桑皇国陸軍、欧州派遣スオムス方面部隊糧食担当員 伊勢崎伍長であります」

「ふふふ、扶桑皇国海軍、迫水ハルカ一飛曹ですっ!!」  
迫水一飛曹が直立不動で行ったのに対して智子さんは不機嫌な様子で敬礼を返していた。あちらの方が階級が上ですよ?」

「エースと鬼神の到来を歓迎します」  
そう言っ自分と智子さんの顔を見たハツキネン大尉。自分の顔を見たときほんの一瞬であるが気の毒そうな表情が浮かんだのを見

逃さなかった。

物資を雪上車へ積み込み雪上車に揺られブリーフィングルームへと案内された。元は倉庫だったようなボロい建物だった。石油ストーブが二つほど置かれそれを挟むように椅子が置かれていた。

目の前の黒板には英語もといブリタニア語で何か書かれていた。自分の拙い語学力で『スオムス義勇独立飛行中隊指揮所』と書いてあるのがなんとか理解できた。ここでの会話はブリタニア語で行われるようだが大丈夫だろうか。

智子さんは唇をへの字に曲げつまらなさそうに、迫水一飛曹はそわそわしながら中隊長が来るのを待っていた。周りを見てみると自分たち以外に三人ほどの西洋人が座っていた。一人は本を読んでいる金髪のおかつぱ頭で迫水一飛曹より幼く、もう一人は腰まで伸ばした金髪と制服を胸で窮屈そうに盛り上げていた。最後の一人に至っては黒い革のライダージャケットを着ている銀髪で美人だったがひつきりなしにタバコをふかしているのと、何かに悩んでいるかのように眉間にしわを寄せていることどつつきにくい印象を与えていた。

この場に男一人だけはやはり注目を浴びるようでこちらをチラチラと見てきていたが気にせず目を閉じて中隊長が来るのを待つ。部屋には、ページをめくる音だけが響いていた。

どれだけの時間をそうやって過ごしたのだろうか廊下から足音が聞こえてきた。一人は背が高くもう一人は背が低いようだった。目覚めてから鋭くなった感覚と付き合っているうちに微かな足音の違いだけで人数が把握できるまでになっていた。少し時間がたった時バタンと、白に近い薄い金髪の少女が書類の束を抱えて入ってきて、そして盛大にこけた。

「あわわわ！」

派手に散らばった書類を集めている。見ていられないので手伝う。

「あ、あの、その、ありがとうございます」

「困っている人を助けるのは当然の事なので」

書類を集め終わったときハツキネン大尉が部屋に入ってきた。

「話は終わりましたか？」

「す、すみません！両手が塞がってそれでドアを開けようとしたら…」

シヨボーンと頭を下げている少女。

「なら、早く挨拶してください」

事務的に返答するハツキネン大尉。少女は黒板の前にツカツカと歩いて行った。再び椅子に腰かけ話が始まるのを待つ。

黒板の前に立った少女はひどく緊張しているようで、一度深呼吸して手のひらに何かを書いてなめる仕草をした。

「遠路はるばるようこそスオムスへ!!各国からの義勇兵の皆様方を歓迎します。今日から皆さんと一緒に戦うことになりました、エルマ・レイヴオネン中尉です。皆さん頑張ってください!!」

そう言っただけでビシツと敬礼を行う。しかし、敬礼を返したのは自分だけであった。それを見てエルマ中尉は泣きそうであった。

「え、えーとそれでは皆さん自己紹介をお願いします。それではこちらの、男性の方お願いします」

目があったため自己紹介のトップバッターに指名されてしまった。断ろうにもエルマ中尉の目がやってくれますよね?と訴えかけてくるもんだから断れない。頷いて席を立つ。

「扶桑皇国陸軍、欧州派遣スオムス方面部隊糧食担当員伊勢崎 正伍長であります。分隊内では選抜射手に任命されました。特技は裁縫や料理です。柔術と銃剣道も得意です。どうぞよろしく願います」

自己紹介を終え席に座る。

「え、えーとお次は、誰にしましょう?」

オロオロとしているエルマ中尉。かわいそうなので助け舟を出す。

「次、迫水一飛曹お願いします」

「え、あつ、はい!!」

「扶桑皇国海軍、迫水ハルカ一等飛行兵曹です！趣味は、あんまりうまくないけどお菓子作りです。特技は弓道です」

弓道が得意なのは意外であった。

「次はミーが行くねー。リベリオン海軍から来ました、キャサリン・オヘア少尉です！皆さんどうぞよろしくねー！男が部隊にいるのは初めてでドキドキするねー。」

こちらを見ながら無邪気にパタパタと両手を振っている。こちらは頭を軽く下げた。

「ミーの特技はこれねー！」

言うなり素早く腰のホルスターに手を伸ばしたので椅子から転げ落ちるようになって伏せる。それと同時に腰だめにしたリボルヴアーの撃鉄を左手ではじいて連射した。部屋に黒色火薬の凶太い発射音が響き渡った。

「OH！驚かないで！空砲です！これ挨拶用ね！」

西部劇のガンマンよろしくくるくと指でリボルヴアーを回してホルスターに戻す。空砲と言っていたが黒板にはしっかりと弾痕が残されていた。ハツキネン大尉がそれを黙って指差すと

「ソーリー！間違えましたー！誰にでも失敗はありますねー」

あはははは、とおおらか笑顔でそう言った。心臓に悪すぎる。

「え、えつと…、次！」

やけくそ気味にエルマ中尉が一番幼く見えるおかつぱの少女を指さした。少女は読んでいた本を几帳面に鞆へしまい、ぼろぼろのノートを取り出し掲げた。

「私はカールスラント空軍、ウルスラ・ハルトマン曹長です。カールスラント軍人のモットーは『教科書から学ぶ』です。したがって私はこの空軍教範にのっとり行動します」

「ここはスオムスなんですけど・・・」

「私はカールスラント空軍軍人です。それはもう、南極だろうが地の果てでも変わらないことです。したがって、中隊長殿におかれまし

てはこれを熟読くださるようお願いいたします」

そういつてウルスラ曹長はエルマ中尉に教範を手渡した。エルマ中尉はパラパラと教範をめくっていたが読めなかったようで机の上に置いていた。

「次の方、お、お願いします」

そういつてエルマ中尉が指名したのは革のライダースーツを着た銀髪の少女であった。指名された少女はガタン、と無言で立ち上がった。

「ブリタニア空軍、エリザベス・F・ビューイング。階級は少尉」

気難しそうな声でそれだけを言うのと座ってしまった。座るときこちらを訝しげに見ていた。あの戦いの後、自分のやったことは顔写真付きで世界中の新聞に掲載された。そんな人間がどうしてこんな辺鄙な場所に配属されたのか不思議に思ったのだろうか。それを置いて身のこなしというか雰囲気から実戦を経験しているのが感じ取れた。それに腰に刃物を持っているようだ。

「えっと、他には？」

エルマ中尉が困ったようにそうビューリング少尉に尋ねた。

「他にはとほ？」

「ほら、私たち仲良しさんになるんですからいろいろ知っておいた方がいいじゃないですか。例えば、・・・好きな食べ物とか、癖とか特技とか」

エルマ中尉はそれいる？といったような質問項目を並べていた。

「装備機は？」

ハツキネン大尉がビューリング中尉に質問をした。

「ハリケーン」

ビューリング少尉は短くそう答えた。

「いいストライカーね」

ハツキネン大尉は、ビューリング少尉にそうつぶやいて見せた。

「では、最後の人・・・」

そういつてエルマ中尉は智子さんに自己紹介をするように促した。

「扶桑皇国陸軍、穴拭智子。階級は少尉、特技は格闘戦」



不機嫌そうに智子さんはそう述べたあととんでもないことを言い出した。

「失礼ですが、私以外のメンバーの中で空戦経験があるのはいいますか？」

「あなた以外には空戦経験がないようですが」

「なら私に訓練を一任してもらってもよろしいでしょうか？」

智子さんの言葉に気圧されたエルマ中尉はハツキネン大尉を困ったように見つめた。

「いいんじゃないでしょうか。空戦経験があるのは彼女だけみたいですよ」

「じゃ、お願いしますね」

そう言つてエルマ中尉は微笑んだ。

「では、ささやかながら歓迎会を設けました」

「ワオ！歓迎会ですか！料理に、お酒、最高ですね」

オヘア少尉が嬉しそうに歓声を上げた。エルマ中尉が歓迎会へと案内しようとしたとき智子さんが立ちふさがった。

「歓迎会は後にしてメンバーの実力を見ましょう」

「でも、料理がもう準備出来て・・・」

「実力を見る方が先です!!歓迎会なんて後からでもできます!!」

ギロリとエルマ中尉を睨む智子さん。

「それに先程中尉は私に訓練を一任するとおっしゃいましたよね？」

エルマ中尉は蛇ににらまれたカエルのように縮こまりはいい…と半泣きで頷いていた。

自分以外の中隊のメンバーはストライカーを履いて模擬空戦を行っており、スオムスの寒空にエンジンを響かせている。一方の自分は格納庫で愛銃である三十八式歩兵銃のメンテナンスを木箱に腰かけて行っていた。

本来の三十八式とは違い、自分にはスコープ装着できるような手を加えてあった。三十八式を基にした九十七式狙撃銃という狙撃銃もあるが手になじんだこつちの方が使いやすい。

ばらした三八式を組み立てなおしていると格納庫の入り口から誰かが入ってきた。手を止めて、入ってきた人物を見るとハツキネン大尉であった。

「到着早々銃の整備とは精が出ますね」

一瞬皮肉を言われたかと思っただがそうではなく、本心からのようだった。

「何かあった時に使えないと困るでしょう？それにこの基地の周りにはいい獲物がいそうですしね」

ガチャツとボルトを引き、異常がないことを確認しボルトを元に戻す。

「確かにあなたは経験してましたね」

ハツキネン大尉が顔と左手の火傷痕を一瞬だけみてそう言った。

「あんなことはもう御免ですよ」

奥歯を砕けんばかりにかみしめ、鈍痛が走る顔の火傷痕を左手で覆った。この鈍痛は気が昂った時などによく起き、医者にも治せないようだ。

ハツキネン大尉は何も言わずそんな自分をただただ見ていた。

鈍痛が落ち着き、装備品の確認が一通り済んだころ模擬戦をしていた智子さんたちが戻ってきた。智子さんはひどく不機嫌な様子で中隊メンバーにダメ出しをしていた。

智子さんが猛訓練をするといったときに不満を漏らしたメンバーを怒鳴りつけていると、漫画で見るとような「おほほほほ！」というお嬢様笑いが聞こえてきた。

声のした方を見ると十人ほどの少女たちがこちらを見ていた。十人ともそろいのボアのついたジャケットを着て、腕にはスオムス空軍

の青十字マーク。そして、足にはスマートなストライカーを履いていた。

「アホネン大尉！」

エルマ中尉がそう言ったときに、智子さんと迫水一飛曹が爆笑した。扶桑人がその名前聞いたらまあ笑うよね。

「何がおかしいのよ！」

そう智子さんに詰め寄ったのは金髪で巻き毛の少女であった。前髪は持ち上げられ、切れ長の瞳をしておりどこか意地の悪そうな顔であった。

「ごめんなさい、外国の名字に文句はつける気はないのだけど……」  
智子さんがアホネン大尉にそう言ったとき迫水一飛曹の口が小さく動いた。離れているため聞き取れなかったが、近くにいた智子さんが腹を抱え迫水一飛曹の肩を叩きながら笑っていた。

それを見て顔を真っ赤にしたアホネン大尉が智子さんに平手打ちを食らわせた。格納庫に子気味いい音が響き渡った。

それを機に、智子中尉とアホネン大尉の口論が始まったので黙って見守っていた。

「第一中隊、ナンバーワンの落ちこぼれにはピッタリの任務だと思わない？こんな国で持て余された、落ちこぼれを寄せ集めた『いらん子中隊』の指揮官なんて」

アホネン大尉の後ろに控えた少女たちが大声で笑った。オヘア少尉が反論したものの『壊し屋』<sup>クラッシュヤー</sup>であると指摘された。63機は壊しすぎだと思ふ。ダックスフントの可愛らしい犬耳を生やしたビューリング少尉に至っては82回の軍規違反に、軍法会議を8回も受けていたようだ。営巢入りは55回も経験していると本人談。ウルストラ曹長は一部隊を『実験』で壊滅させたそうだ。問題児だらけじゃね？

迫水一飛曹は百合の花が咲いたとだけ言っておこう。表現するにはちよつとハードルが高すぎる…。

欧州で発生した第2次ネウロイ大戦は小国であるスオムスさえ包み込まんとしていた。スオムスが怪異の侵攻に耐えきるのか、それとも蹂躪されるのか。それを知るのは神のみである。

## 8話 襲撃

燃え盛り、黒煙を立ち上げている平原をひたすらに走っている。いつから走っているのか、どうして走っているかはわからない。それでも『何か』から逃げるために必死に走っている。息を切らしながら足を動かして遠ざかろうとしていたが、ふいに何かに躓き地面に転んでしまった。

何に躓いたのか見ると、黒焦げを通り越して炭のような手が自分の足を掴んでいた。手が生えているあたりが盛り上がっていき、その手と同じような炭になっている『人間だったモノ』が現れた。

「何であなたが生きているの？ 私は死んだのに、何であなたは今のうと生きさらばえているの？」

ノイズの混じった声でそう言いながら迫ってくる。逃げようにも強く足を掴まれているため振りほどけない。

「放せ、放しやがれよ！」

振りほどこうとすればするほど掴む力は強くなってくる。

「私だけが死ぬのは不公平だから、あなたもこっちに来てよ」

炭になった手で『モノ』は自分の顔を万力のような力で掴み無理やり動かさせる。その先には、4つ脚の戦車型怪異が砲口をこちらへ向けている光景があった。

砲口から閃光がきらめきそして…。

「うわあああああ…!! ハアハア、夢か…」

あの戦闘の後、何度この夢を見たことだろうか。頭を振って夢のことを忘れようとした。枕元に置いてある腕時計は朝の五時半を指していた。

元は倉庫の一室であつただろう一室は、床板の一部がずれそこから入り込んでくる隙間風により冷やされていた。木箱を三つ並べてシーツを敷き毛布を乗せたベットからのっそりと起き上がる。

寝間着から軍服へ着替え革ベルトに護身用のベレッツタM1934をホルスターに入れた。これは、昇進祝いとして第一飛行戦隊のメンバーから贈られたものだ。部屋から出て、食堂兼休憩室へ向かう。自分以外誰も起きていないのかひっそりとしており寒さを助長させていた。

エプロンを着て厨房に立ち朝食の準備をする。食糧庫から調達してきた玉ねぎ、人参、ジャガイモ、ベーコンを切る。鍋にブイヨンを入れて先程切った食材とソーセージを煮込んでいく。煮込んでいる間、灰汁が出るので慎重にすくっていく。ソーセージに火が通るととりだし、ベーコンを入れジャガイモが柔らかくなったらカールスラント料理のアイントプフの完成だ。先程ゆでたソーセージとライ麦パンを皿に入れていく。

ここに来たときは、義勇独立飛行中隊に割り当てられていた食料は、第一中隊に比べ質も量も格段に劣るモノであつた。割り当てられた食糧で作れたのは水のようなジャガイモのスープであり、栄養があるとは言えないような味の代物であつた。こんなものを中隊に提供するのには炊事兵としてはできなかつた。そこで、支給されていたタバコなどの物々交換や希少な存在である男性という立場を利用して良い食材を調達できた。食料を管理している士官に、ホストのように甘い囁きを行い第一中隊分の食料をいくらか横流ししてもらえるようになった。

スープを器によそっているとき食堂に智子さんと迫水一飛曹が入ってきた。早朝からの訓練が終わつたようだ。この訓練には、智子さんと迫水一飛曹それにエルマ中尉の3名しか訓練に参加しておらず、残りのメンバーは自室に引きこもってしまっている。手を止め、智子さんたちに敬礼する。

「おはようございます、穴拭少尉、迫水一等飛行兵曹、エルマ中尉」  
「おはよう。いいにおいがするけど今朝は何？」

敬礼を止めるように手で制しながら智子さんが朝食のメニューを聞いてきた。

「今日はカールスラントのアントプフと、ライ麦パン。それに、グリツリ・マツカラというスオムスのソーセージです」

「それは、豪華ね。少し前まで、ジャガイモの水みたいなのを飲んでいたのでウソみたい。どんな手品を使ったのかしらね」

「手品はタネを明かすとおしまいですから」

そう返しつつ3人分のスープをよそい、配膳し席についてもらう。メンバーの起きてくる時間がバラバラなため来た人から食べることになっている。全員そろってもらった方がこちらとしてもありがたいのだが、簡単にはいかないようだ。

食堂には、アントプフの香りが漂い食器が奏でるカチャカチャという音が響き渡っていた。黙々と食事をしている三人。それを横目に見ながら厨房で使った調理器具を洗っていく。

調理器具の大半を洗い終わったときドアが勢いよく開かれオヘア少尉とウルスラ曹長が入ってきた。

「グッドモーニング。いいにおいがしますねー。おなか空いてきましたー!」

「おはようございます」

底抜けに明るい声で挨拶をするキャサリン少尉。それとは対照的に静かな声で挨拶をしたウルスラ曹長。

「おはようございます、オヘア少尉、ウルスラ曹長」

手をふき先程と同じように二人に敬礼する。

「そんなに堅苦しくしなくてもいいねー。それよりも今朝は何ですか?」

「今朝は、カールスラント料理のアントプフというスープとソーセージにライ麦パンです」

「それは美味しそうねー」

目をキラキラさせているオヘア少尉。ウルスラ曹長も分かりづらいがどこことなく嬉しそうだった。故郷であるカールスラントから、遠く離れた地でカールスラントの料理が食べられるなんて思いもよら

なかったのだろう。自分だって今味噌汁を出されたら嬉しい。

「本当に 안타って家事やらせたらピカイチよね。どうやったらそこまでできるようになるのかしらね」

食事を終えた智子さんがそう声をかけてきた。

「簡単なことですよ、やらなきゃいけない環境に身を置いたらできるようになりますよ。なんなら畑仕事もやってみましようか？きつとできますよ」

苦笑交じりにそう返した。それを聞いていたオヘア少尉が話に割り込んできた。

「シヨウは、畑仕事もできるのねー？」

「家で畑をやってましたからね。牛の世話もできますよ？」

そう言ったとき突然オヘア少尉に両手を掴まれた。

「フソウにいるのはもったいないねー！テキサスにある実家の牧場でその才能活かすべきねー。親も喜ぶねー」

「は、はあ」

「両親も言ってたね。家事だけじゃなくて畑仕事もできる男を婿にしないって。それにフソウ人、仕事熱心ねー。わたし、牧場に居た時フソウ人が朝早くから夜更けまで熱心に働いてるのよく見かけたねー。シヨウなら親も気に入ると思うねー。軍を除隊したら私と一緒にテキサスで牧場やるね。きつと楽しいねー！」

期待するような目でこちらを見てくるオヘア少尉。かわいそうだが断らなくては。

「すみません、扶桑には自分を待っている人がいるので」

その答えを聞いて悲しげな顔をしたオヘア少尉。

「それなら仕方ないねー」

「ですが、テキサスを訪れることがあればお願いしますね」

「…！任せるねー」

そう言っただけでオヘア少尉は食事に戻っていった。背後から突き刺さるような視線を感じたので振り向くと智子さんがこちらを睨んでいた。

「どうしましたか穴拭少尉？」



「別にっ!!」

そう言つて食堂から出ていってしまった。一体どうしたんだろう。

「ビューリング少尉、いい加減起きてください。あなたが朝食を片づけてくれないと鍋を洗えないんですが」

そう言いながらビューリング少尉の部屋の扉をノックする。しかし、反応は帰つてこない。

「ビューリング少尉、部屋に入りますよ」

そう言つてドアノブに手をかけたとき言いようのない寒気を感じた。それをこらえて扉を開けた。部屋は、カーテンを閉めているのが暗かった。その時、刃物が自分に向かって振り下ろされるのが分かった。素早く振り下ろされているはずなのに、自分の目にはスローモーションのように映っていた。体が自然に動き、左腕で刃物を持つているはずの手首を受け、足を払いながら革ベルトに装着している八寸剣鉈を素早く抜き、襲撃してきた人物を壁へと押し付け剣鉈をのど元へ刃を当てた。

「すまないが伍長、のど元の刃物をどけてくれないか。モーニングコールにしては少々きつすぎる」

襲撃してきた人物は、自分が起こすはずだったビューリング少尉であった。剣鉈を鞘へ戻し後ろへ飛びのき直立不動の姿勢をとる。先程まで刃をのど元へと押し付けられていたはずなのに平然とした様子だった。

「申し訳ありませんでした、ビューリング少尉!!」

「謝ることはない、先に攻撃したのは私だしな。しかし、いい動きだった。久々に面白いものを見せてもらったよ。しかし、男性に迫られるとは思わなかった」

そう言いながらベットに戻ってしまおうビュウリング少尉。

「あの、少尉起きてもらってもいいですか？少尉が朝食を済ませてくださらないと、食器を洗えないんですが」

「なら、私の部屋まで持ってきて来てくれないか？それなら、伍長も洗いや物ができるし私は朝食をとれる。それに男性に、壁ドンされたという貴重な体験を夢でもう一度見る必要があるからな。それよりも、君は左目について何も気がつかないのか？」

「何のことです？若干赤くなってることなら知ってますよ」

「そうじゃないんだが…。まあ、知らない方がいいだろうな」

意味深な言葉を残して毛布をかぶり、再び眠りについてしまったビュウリング少尉。部屋に残された自分には食堂へ戻るという選択肢しか残されていなかった。

正が部屋から出ていったのを見計らいビュウリングはのっそりと起き上がった。そして、頬を両手でおさえその端正な顔を真っ赤に染めた。

「まさか、あんなことをされるとは…」

奇襲をかけたらどんな反応をするのだろうかというほんのいたずら心だったのだが、まさか壁ドンされるとは思わなかったのだ。男性から迫られるという、全世界の女性にとって願ったりかなったりの状況は、男性を自分の父親以外知らない少女にはいささか刺激が強いものであった。

「これからどんな顔して会えばいいんだ…」

顔を真っ赤にした少女のつぶやきは、静かに吸い込まれ消えていった。

「しかし、あいつも大変だな。本人は気づいてないみたいだし…な…」

彼の左目を覗き込んだ時のことを思い出した。彼は、自分の体がどうなっているのか知らないようだったがきつと知らない方が本人にとって幸せだろう。そう結論をまとめたビューリングは眠りへと引き込まれていった。

「アンタ、この部隊についてどう思ってるのよ？」

そう言って、木箱を並べたベットに腰かけている智子さんが聞いてきた。今自分がいるのは倉庫、もとい独立飛行中隊の兵舎の智子さんの部屋だ。部屋の前を通り過ぎようとした際いきなり連れ込まれたのである。

「どうって聞かれましてもねえ…。なんて答えたらいいか分からんですよ」

部屋の壁にもたれかかりながらそう答える。自分の担当は飯づくりであるため専門外のことを聞かれても答えようがないのだ。

「分かりやすく聞きましょうか。部隊の雰囲気について感じることはある？」

「ああ、その質問なら答えやすいですね。見ていて感じるのは、どこか『諦め』があるような気がしますね」

「諦めね…」

「あくまで個人の感じることでなんであてにしない方がいいですよ」

「十分参考になるわよ。アンタのそういう観察眼は頼りにしてるんだから」

「ハハハ、そりやどうも」

「それで、話が変わるんだけど、アンタこの後暇だったら、その、あの買い物でも…」

智子さんが、若干顔を赤くしながら何かを言おうとしたとき部屋の

扉が勢い良く開かれた。

「ちよつと説明してくださるかしら!!」

怒り心頭といった様子で部屋に入ってきたのはアホネン大尉だった。

「「…」」

部屋を沈黙が支配する。アホネン大尉は、目を丸くしているし智子さんは一気に不機嫌になった。

「おおお、男!!なんで男がこんなところに!?!」

「いきなり部屋に入ってきて何なのよ…!」

敵意むき出し状態である智子さん。

「どういうことか説明してくださるかしら、まさか情欲のなすがままに、無理やり連れ込んだんじゃないでしょうね!?!」

「あ、あの大尉、説明をさせて…」

「かわいそうに、今解放して差し上げますからね」

「あの、説明を…」

「何もおつしやらなくてもいいですわ。不良外国人に危ない目にあわされそうになったのでしょうか。今すぐこんな不良外国人のもとから、解放して差し上げますわ」

アホネン大尉は、智子さんが自分を無理やり連れ込んで、夏冬の有明で販売される本のようなことをしようとしていたと考えていらつしやるようだ。いい加減説明させてほしい。

「不良外国人って何よ!!私は、あんたたちの国を助けにわざわざ田舎くんたりまで来てやってんの!!」

「確かに頼みましたわ、頼りになる助っ人を送って頂戴と!!なのに、なんですかあの訓練の体たらくは!!」

「仕方ないじゃない、実戦を経験した事のない子もいるんだから」

「それを抜きにしてもひどすぎますわ。大体、あなたたちの戦闘脚はどこからどう見ても二線級ばかりじゃないの!!どれだけ、それぞれの国が頼りになる助っ人を送り込んできたのが、よくわかりますわ!!」

「な、あんたねえ!!」

「優秀な方々がお揃いになっているようで、なにしろ男を連れ込む余裕があるんですからね」

「そいつはうちんところのメンバーよ!!」

「嘘おっしやい!!今時軍隊に入隊している男性なんてありえませんか。百歩譲っていたとしてもこんな前線まで来るはずもないでしょう!!いたとしたらとんだ変わり者ですわね」

「変わり者ならそこにいるじゃない。しかも、実戦経験済みよ。それも、ネウロイの集団を一人で潰して見せた猛者よ」

そう言つて自分を指さした智子さん。

「またまたご冗談を」

『『ウラルの鬼神』つて名前ぐらいだったら聞いたことあるでしょう?』

「ええ、よく存じておりますわ。新聞で何度も写真が載っているのを拝見いたしましたもの。なにしろ男性でありながら兵士として、単身ネウロイの集団を壊滅させた方ですから、話題にならないほうがおかしいですわ」

「なら話が早いわね。こいつがその本人よ。アンタもいい加減、略帽を取りなさいよ」

智子さんからそう指示されしゅしゅ略帽をとる。略帽の下から現れた顔の息をのむアホネン大尉。

「どうも初めましてアホネン大尉、欧州派遣スオムス方面糧食担当員 伊勢崎 正です。階級は伍長であります。巷では、『ウラルの鬼神』などと呼ばれていますがお気になさらず」

金魚よろしく口をパクパクとさせているアホネン大尉。二人でひそひそと話しながら大尉の様子をうかがう。

「智子さん、大尉大丈夫なんすかね?」

「大丈夫じゃない? いざとなればこうガツンとやって外に放り出せば・・・」

そう言つて鞘に入れたままの軍刀を振り下ろすような動作をした。

(上官にそれは) ますいですよ!!

「ぜひ第一中隊へいらしてください! 貴方のような方はこんな部隊

にふさわしくありませんわ!!」

復活したアホネン大尉に詰め寄られる。それを聞いた智子さんは怒髪冠を衝くといわんやな様子になった。

「何勝手に引き抜こうとしてんのよ!!」

「優秀な人材は優秀な部隊にいるのは当然でなくて?あなた方みたいな方々のところにいるのは宝の持ち腐れですわ。それに、糧食担当ということでしたら我が中隊の方が存分に腕を振るえます。そちら支給される食材じゃ満足に作れないでしょう?いかかです?」

「それは魅力的な提案ですね」

「なら、今すぐにでも…」

「しかしながら大尉、私はある食材を工夫して最高の料理を出すのが炊事兵の職務であると考えております。食材があるからという理由で部隊を変えるわけにはいきません。残念ながら大尉の提案をお断りさせていただきます」

もっともらしい理由をつけて断ったが本音としては、あの部隊はちよつと特殊すぎるので遠慮したいのだ。まあウ義勇独立飛行中隊チにも第一中隊むけの人物はいるのだが……。

「そうですか、それなら仕方ありませんわね」

残念そうな様子である大尉。

「今回は断られましたけど、いずれ我が中隊の厨房に立たせて見せませわ!!」

そう言い残して、高笑いと共に部屋から去っていった。

「何だったのよ、いったい…」

「さあ、わかりません。そういや何を言いかけてたんですか智子さん」

アホネン大尉が部屋に乱入してくる前に、智子さんが何か言いかけていたのを思い出したので尋ねる。

「え、えっと私午後から非番だから街に行こうと思ってるんだけど。よ、よければ一緒にどうかなって…」

何かかかっておくものはあったかなとあごに手を当てつつ考え込む。

「い、いやなら私一人で行くから無理にとは言わないんだけど…」  
「いえちやうど買い込むものもありますから喜んでお供いたしま  
す」

そう答えると智子さんは後ろを向きガッツポーズをしていた。

「…この機を逃したら駄目よ。穴拭智子。武子たちがいないスオム  
スでこそ勝負をかけるのよ。ここでできる女ってことを証明できれ  
ば、きつと…」

ニヤアという表現が似合うような笑みを浮かべながら何かブツブ  
ツ言っている智子さん。見た目が麗しいだけあつてうわあとしか言  
えない。

そつと部屋へ外套を取りに向かった。

基地から30分ほど車を走らせたところに、人口2千人ほどのス  
ラッセンという町がある。ぬかるんだ道に悪戦苦闘しながら向かう。  
助手席に座っている智子さんは、ぼんやりとしながら流れゆくスオム  
スの景色を眺めていた。

クリスマスを一か月後に控えた町は、ネウロイの侵攻に怯える国境  
の町でありながら人々は、その顔に笑顔を浮かべていた。

適当なところに車を停めると町の人々は、東洋人である自分たちが  
珍しいのか立ち止まって見つめてきた。火傷痕を少しでも隠すため  
略帽を目深にかぶりなおした。

好奇心旺盛な子供たち（圧倒的に女子が多い）が寄ってきて何やら  
話しかけてきた。何かを伝えたいようだがスオムス語が分からない  
ため理解できなかつた。智子さんの方をチラッと見ると同じような  
状況であつた。

「あー、すまん何を言ってるかさっぱり分からん。あー、ヒュー、  
ヒューヴェーパイヴェー」

たどたどしいながらも少し憶えたスオムス語で話しかける。

「ヒューヴェーパイヴェー！」

まぶしいばかりの笑顔でそう返され、再びスオムス語でまくし始めた。智子さんと二人理解できず困っていると、一人の老婆が話しかけてきた。

「外国の方ですか？」

それは聞きなれたブリタニア語であった。ええと二人して頷くと、老婆は子供たちに話しかけ訳してくれた。

「あなたはウィッチか？と彼女らは聞いているんですよ」

「確かにそうですけど、どうして分かったんでしょうか？」

「車がカウハバ基地ナンバーだし、あなたぐらいの年頃で軍服を着てるのはウィッチ以外ないでしょう。ネウロイをやっつけに来てくれたウィッチなんじゃないか？ってのは子供にもわかりますよ」

「なるほど。それにしても、ブリタニア語がお上手ですね」

「大学の教授をやっていますね。今は引退した身ですが・・・」  
智子さんと教授をやっていたという老婆の話を聞いていると子供たちが自分の外套の裾を引っ張っていた。

「おい、待ってくれよ。どこに連れてく気だ？」

「ああ、自分たちの家に来ないかとさそっているんですよ」

「いったいどこにあるんだい？」

かがんで子供たちたちと目を合わせながら身振り手振りを交えて尋ねる。言葉は伝わってなかったようだが、身振りで分かってくれたのか一番年長らしき子が、町の一角を指さした。

それは、レンガ造りの立派な建物であった。

「へえ、なかなか大きいのね。立派なおうちじゃない。みんなここに住んでいるの？」

あとからついてきた智子さんがそう尋ねると、老婆がこの建物について教えてくれた。

「おうちというか・・・、あそこは孤児院なんです」

「孤児院!？」

「ええ・・・。この子たちは親が死んだり、育てることが困難になって、行き場をなくした子たちなんです」

子供たちは孤児院に来てもらいたいようだが、遠慮していると老婆



が諭してくれた。寂しそうな顔を一瞬したが、すぐに笑顔になりこちらに何か言ってから孤児院へ消えていった。

「頑張つてネウロイをやっつけてね。だそうですよ」

その言葉は智子さんに重くのしかかったようであらため息をついていた。

「じゃあ、私は酒屋に行くけどアンタはどうするの？」

「少し買い物してから向かいますよ」

「なら先に行つてるわよ」

「了解」

智子さんはそういうと、老婆に酒屋の場所を聞き酒屋へ行つてしまった。買い物に向かおうとすると老婆に呼び止められた。

「先程から思つてたんですが、何故男性であるあなたが軍隊にいますか？」

陸軍に入隊してから幾度となく聞かれた質問だ。

「お恥ずかしながら私は、ウィッチの飛ぶ姿に一目惚れしましてね。

それに…」

「それに？」

「もう、2度とあの光景は繰り返させない。ただそれだけですよ。それでは失礼いたします」

そう言つて老婆に背を向け歩き出す。そうだ2度とあんな光景を作らせるものか。

その後いくらか食料などを買い込み目的地の一つである銃砲店へ向かった。三十八式の弾は扶桑から多めに持つてくる事ができたのだが、M1934用の9ミリショット弾が心もとないのだ。

店内に入り、店主であろうおばちゃんに9ミリショット弾を見せ、これが欲しいということを手振り手振りを交えて伝えた。100発ほど欲しいと紙に書いたはずのだが、目の前には50発入りの弾薬

箱が3箱ほど積まれていた。そのことを伝えるとウィンクが返ってきた。多分サービスなのだろう。ありがたく150発の9ミリショット弾を受け取り店を出た。

店を出ると、智子さんと出くわした。酒が残っているのか少し頬が赤くなっており、どこか色っぽかった。行きと同じように車を運転している、町の方向から爆発音が聞こえた。

すわ、何かと車のラジオをつけるとアナウンサーが何やらまくし立てていた。スオムス語に混じって『ネウロイ』という不穏な単語が聞こえてきた。

「智子さん!!」

「分かっているわよーなんで、こんな時に!!」

アクセルを踏み込んだ瞬間、前方に黒い点が見えた。その時、ビューリング少尉から奇襲を受けたとき以上の悪寒が走った。咄嗟にハンドルを切ると、先ほどまで車があった位置の泥が跳ねた。機銃掃射を受けたらしい。

機銃掃射をしたのは、寸胴な、ハエを思わせるような形をしたラロスと呼称されていたネウロイであった。智子さんの方に視線を一瞬やると悔しそうに唇をかみしめていた。バックミラーを見ると、先ほどのラロスが反転しているときだった。

アクセルを思い切り踏み込むも、速度差は五倍もありすぐに追いつかれてしまった。腰の拳銃を抜き、ハンドルを左手で操りながら、ラロスに向けて発砲した。最も照準していない上、不安定な道を走っているので一発も命中しなかった。ラロスの翼がきらめき、ガラスが割れ車内に破片が飛び散った。二の腕に熱さを感じたので、機銃弾でもかすったのだろう。痛さで顔をしかめながらもハンドルを操る。

前方で、ラロスが再び反転してきた。どれだけしつこいのだろう。機首をこちらに向けようとしたとき翼が燃え上がり横転するのが見えた。上から小さな点が降下するのが見えた、シルエットは義勇中隊のどれでもないものだったので、おそらく第一中隊のウィッチだろう。脳裏には、勝気そうな顔が浮かんでいた。

智子さんに応急処置をしてもらい、やつとのこととで基地へたどり着いた。奇襲を受け、建物はあちらこちらから火の手が上がっていた。格納庫の近くで車を止め智子さんを降ろした。格納庫へ一目散で駆けっていく智子さん。

無事に格納庫へとたどり着いたのを見届け、腕に巻き付けられている包帯代わりの布を見る。腕からの出血で、布は真っ赤に染まっていた。包帯を、ほどこき傷跡を確認するがそこには、傷跡はなく真新しい皮膚があつた。

「一体どうなつてんだよ、この体はよお……」

ビューリング少尉が言いかけていたことに何か関係があるのかもしれない。だが、今の自分は知りたくもなかった。

「せめて『人間』のままであつてくれよ」

そんな自分の儂い祈りは、ボロボロになった車を吹き抜けていく風に流されていった。

1939年11月、欧州でのネウロイとの戦闘は激化の一途をたどりカールスラントやオラーシャのみならず、小国スオムスにも波及した。

小国を飲み込まんとするネウロイの前にあつては、スオムスは一本のか弱い蠟燭のようなものであつた。いつ吹き消されるか分からない。そんな中でも、たつた一つ分かつていることがあつた。

それは、消されることがないよう抗い続けるという事だけだった。

## 9 話 吹雪の後の邂逅

ネウロイの本格的な侵攻が始まってからはや2週間が経っていた。基地が攻撃を受けてからというもの、智子さんは出撃を繰り返して40機撃墜を達成していた。それと同時に、中隊のメンバーとの溝は深まっており廊下ですれ違っても挨拶はおろか、目すら合わせないというのはざらであった。何とかしようとして努力してみたが、自分の力ではどうしようもなかった。

また、ネウロイの侵攻が本格化したため物資の消耗が激しくなりカウハバ基地に回される食料の数も以前と比べてじわじわとだが減っていた。満足な食事を作るにはどうしても自ら調達に赴かなくてはならなかった。幸いにも、基地の周囲は森に囲まれておりしばしば鹿やトナカイを見かけることがあった。一匹でも狩って来ることができれば当分の間は、肉には困らないだろう。

「今日一日は、晴れると思います。絶好の狩り日和になりますね」

天気図を見ながらそう言ったスオムス兵士。自分は前線基地の気象観測班のテントを訪ねていた。ここの数日のところ吹雪で外に出られなかったが、今日はうってかわって晴天だった。

「そりやありがたいな。獲れたらいくらか分けるよ」

「楽しみにしていますよ」

気象班の部屋を後にし、与えられたテントで狩りの準備を行う。小さめの魔法瓶に砂糖入りの紅茶を入れ、乾パンと金平糖をいくらか魔法瓶と共に背囊に詰める。濡れることも考えて、着替えの下着と肌着を二重の袋に入れ、これもまた背囊に詰めていく。夕方までには戻ってくるつもりなので荷物は軽めにする。防寒外套の上に革ベルトをつけ120発ほど三八式の弾を持っていく。

狩りの用意を終え外に出ようと廊下を歩いていると小柄な人影が歩いてくるのが見えた。小柄な人物と言われると3人ほど心当たりがあるのだが、白衣を着ている人物は一人しか知らない。

「おはようございます、ハルトマン曹長」

立ち止まり軽く頭を下げ挨拶をするハルトマン曹長。脇には本を抱えている。

「今日は、いい天気ですね」

「そう」

それ以上の会話は続かず気まずい沈黙が場を支配する。

「それでは、また」

その空気に耐えられなくなった自分はそそくさとその場を後にした。次こそは、会話を続かせてみせるぞと思いつながら。

ウルスラは、去っていく彼の背中を見つめていた。

「また話せなかった…」

中隊のメンバーはことあるごとに積極的に彼に話しかけていたし、むしろ彼の方から話しかけていた。いつも自分はその光景を見ているだけだった。何度か彼の方から話しかけてくれたのだがそのたびに、先ほどの会話のようになってしまっていた。

いつ話しかけられてもいいように頭の中で何度もどう返したらいいかを考えていた。でも、実際に話しかけると男性と話した経験がないため、緊張してしまい不愛想な返事しかできなかった。何度かウルスラから話しかけてみようとも思ったが、どう話しかけてみたらいいかわからないうえに、街中で女性を嫌悪の目で見ている男性を見かけたことがあるので話しかけるのを躊躇ってしまっていた。

「やっぱり陰気なのは嫌なのかなあ…」

そう考えると、視界がじんわりと歪み涙がこぼれ出てきた。こぼれ出た涙を白衣の袖で拭いながら、部屋へと向かう。そんなウルスラを、北欧の日差しが包み込んでいた。

意気揚々と狩りに出たもののトナカイに逃げられるわ針葉樹林で

迷うわおまけに天気が悪化して吹雪に巻き込まれるという不幸の3連コンボをくらう羽目になった。

「ああ、クツソ。ついてねえ、魔女のバアサンの呪いか」

こんな状況に毒づいてみるも、魔女ウィッチがいるこの世界ならやろうと思えばできるんだろうなあと思ってしまった。腕時計を見ようにも、視界が確保できない中では見ることもかなわない。

一体どれほどの間この森の中をさまよっているのだろうか。吹雪に逆らって進んでいるのと、厳しい寒さが体力を容赦なく奪っていく。一步、一步がとても重く感じる。背中に背負った愛銃と背囊がさらにそれを助長させていた。視界がだんだんとぼやけていき倒れこんでしまう。起き上がろうにも、体にうまく力が入らず起き上がるこゝとができない。

そんなことをしている間にも身体には雪が積もっていく。自然と自嘲的な笑いがこみ上げる。ネウロイとの戦いで死ぬかもしれないというのはあったが、まさか吹雪の中で死ぬとは思わなかった。

抗うことのできない眠気に襲われ、消耗しきった体はその眠気に身をゆだねようとしている。

「こんなことに…なるんだったら…よしときや…よかった…な…」  
薄れゆく意識の中で最後にそう思った。

吹雪が過ぎ去り、再び姿を現した太陽が差し込んでいる針葉樹林の中を歩いている女性の姿があった。美しい銀髪を肩甲骨あたりまで伸ばし、スオムス軍の制服を着た長身の美女である。彼女は、スオムス陸軍 第12師団第34連隊第6中隊通称『カワウ中隊』中隊長であるアウロラ・E・ユートイライネン中尉であった。

「いやあ、良く寝たなあ」

伸びをしながらそう言い放った彼女の片手には、ヴィーナと呼ばれるスオムス国産のウオツカの瓶が握られていた。散歩という名の索敵に出かけたときに吹雪に巻き込まれ、先ほどまで熊の巣穴跡で吹雪から避難していたのであった。

「早く帰らないとあいつにまたお小言を食らう羽目になるな」

アウロラはへひな鳥と呼んでいる無口な自分の従兵の顔を思い浮かべながら、自分の中隊の陣地へと歩を進めていた。

「これだけ寒くなればネウロイ共の侵攻も少しはマシになるだろうな」

若干の期待を込めてそうつぶやく。最も、ネウロイにとって寒さは活動を遅らせるものであっても数を減らすまではいかないだろう。やれやれと思いつつ歩いていると、何か柔らかいものを踏みつけたのが分かった。地面を見てみると踏みつけたあたりの地面がこんもりと盛り上がっていた。

何が埋まっているのか興味を引かれたアウロラは、その盛り上がっているところを掘り起こすことにした。スコップで慎重に掘っていると見慣れない装備を身につけた兵士がうつ伏せで埋まっているのが分かった。吹雪の中、さまよいここで力尽きてしまったのだろう。

「どこの誰かさんか知らないが、吹雪のなか歩き続けてこんなところでくたばるなんて、ホントついてないよな。ま、丁寧に葬ってやるさ」

と死体に声をかけたその時、死体の指先が微かに動いたような気がした。注意深く死体を観察すると、再び指先が微かに動いていた。慌てて抱きかかえ、呼吸を確認する。ほとんど虫の息に近いような状態ではあったが、かろうじて呼吸をしていることが分かった。魔法力を発動し全速力で陣地へと駆け戻る。

「ひな鳥!!今すぐ毛布持ってこい!!」

〈ひな鳥〉と呼ばれた兵士は転げるようにしてテントに飛び込んできた中隊長に目を丸くしていた。それもそのはず一日ぶりに帰ってきた中隊長が、見慣れぬ装備の兵士を肩に担ぎあげて戻ってきたのだから。

「一体何があつたんです!？」

「説明は後だ、速く!!じやなきやこいつが死んでしまう!!」

その指示を受けて偶然テントにいた他の兵士も指示されたものを集めに駆け回る。装備品を取り外し、凍りかけている外套をストープの近くに干して乾かしておく。外套のフードに覆われていた顔があらわになった時、テントの中に絶叫が響いた。

「お、お、男オオオオオオ!!」

その時、テントの中に毛布を抱えた〈ひな鳥〉が入ってきた。

「どうしました中尉!!何かありましたか!!」

絶叫を聞きつけたほかの兵士たちもテントの入り口にゾロゾロと集まり始める。

「ひ、ひな鳥、男だ…。男がいるぞ!!」

そう言つてベッドを指さしたアウロラ。

「中尉は、かなりお疲れなんじゃないですか？大体こんな前線まで男が来るわけがないでしょ…う」

ベッドに近づいた〈ひな鳥〉だが、抱えていた毛布を放り出してアウロラのもとへ駆け寄ってきた。

「ど、どこから誘拐してきたんですか!？」

「誘拐なんてしてないぞ!!雪の中に埋まっていたんだ!!」

「…その言葉を信用しますよ、中尉。とりあえず、人をあまり近づけない方がいいでしょうね。怯えられたらたまりません。私は、兵士たちには伝えてきません」

「任せた」

〈ひな鳥〉は頷くとぎわついているテントの入り口に向かつていった。放り出された毛布を拾つてベッドへと近づいた。先程、男性だということが多かった時は少々パニックになつてしまったので改めて



顔を見る。

その顔の左側は火傷の跡が残っており痛ましいものであったが、その火傷痕が魅力を加えるものとなっていた。黒々とした髪は、スオムスでめつたに見かけないものだ。

「お前さんはどこから来たんだろうな？」

そう言つて毛布を掛けようとしたとき、重大な問題に気が付いてしまった。彼の軍服が濡れたままであるということだ。アウロラの脳内で天使と悪魔のささやきが交わされてゆく。

前者は、「このままだと悪化するかもしれないから早く脱がさなければならぬぞ」とささやき、後者は「どうせ誰にも見られていないのだからいいじゃないか」とささやきかけてくる。

「そ、そうだけれど脱がさないと悪化するかもしれないからな。決して邪な感情でやっていけないぞ」

アウロラは震える指先で、軍服のボタンをはずしていく。ついには、肌着さえ脱がされ、上半身があらわとなる。屋外の作業で焼けたであろう肌、そして程よく引き締まった筋肉。しかし、その体にも顔と同じような傷跡や火傷痕が付いていた。特に左腕の二の腕、中ほどまで火傷痕で覆われていた。それは生半可なことでついたものではないことがみてとれた。

そういった類の本の中でしか見たことのないような光景にアウロラは、目の前の光景に自分が興奮していることが分かった。鼻から何かの液体が垂れていたがそんなことは気にならなかった。遂に下半身に手を伸ばそうとしたときにテントに何者かが入ってきた。それは、追加の毛布を持ってきたひな鳥であった。

上官が男性を裸にしようとしている目にするひな鳥、そして鼻血を垂らしながら男性を裸にしようとしている光景を部下に見られる上官。両者ともに固まってしまった。そんな中先に声をかけたのはアウロラであった。

「お前も見るか・・・？」

「はい。喜んで!!!」

鼻息荒く答えるひな鳥。

「いやあ、なかなかいい体ですねえ」

「ひな鳥、よだれが垂れてるぞ」

「そういう中尉こそ鼻血出てますよ」

「しょうがないだろ、こんな光景見せられたらたまったもんじゃない」

「そうですよ。今のうちに拜んでおかないと今後一切見られないかもしれませんからね」

「よく言うよ。まあ、そうかもしれないからな。眼に焼き付けておくだけでもしよう」

「ハハハハハハ」

とにかくこの世界の女性はとても残念であった。

## 10話 嵐の前の静けさ

深い冬が訪れ吹きすさぶ吹雪が家の雨戸を叩く中、火鉢のそばで母の現役のウィッチだったころの話聞いていた。たわわに実った稲の上を飛んでいったウィッチの姿を見て以来、ウィッチに関しての書物を読み漁るだけでは飽き足らずこうしてウィッチだった母に話を聞くまでになっていた。

「そんなに面白くない話を聞いて良く飽きないわね。ほんと物好きだわ」

「変わりものやし、何が好きだってええやん。それよりもこの前の続ききかせてや」

「この前の続き…?」

「そうそう、『魔女』ってなんなのかってやつ」

「ああ、その話ね。いい『魔女』はね…」

懐かしい夢を見ていたようだ。ゆつくりと目を開けていく。首だけを動かして周囲を確認していく。どうやらテントで寝かせられているようで真ん中に据え置かれたストーブからパチパチという音が聞こえてきていた。蜘蛛の巣が張ったような状態からだんだんと意識がクリアになってゆく。それに伴い吹雪の中さまよい倒れたということを思い出した。

そんなことがあったはずなのにどうしてテントの中、それもベッドで寝かされていたのだろうか。そんな疑問を抱きながら起き上がるうとしたとき、テントへ誰かが入ってきた。銀糸のように美しい銀髪を肩甲骨のあたりまで伸ばしている長身の美人だった。自分が起き上がるのを見て駆け寄ってきた。

「ああ、良かった目が覚めたか」

「ええ、何とかね。それよりもここはどこですか？それにあなたは？」

「ここはコツラーだ。それと、私はアウロラ・E・ユーティライネン。スオムス陸軍で中尉をやっている」

「失礼しましたユーティライネン中尉。自分は、扶桑陸軍所属 伊勢崎 正伍長であります」

ベッドから出て敬礼しようとしたがみぶりでその動きを制止される。

「あまり動かない方がいい、何しろ雪の中に埋まっていたんだ。そんなに雪が深くなってよかった。もう少し深かったら雪が解けるまでは見つからないからな。本当に目が覚めてよかった」

そう言っただけと息を吐き肩をなでおろす中尉。

「見つけてくださってありがとうございますどうぞいますユーティライ「アウロラだ」：アウロラ中尉」

「よし、それでいい」

非常に満足げな顔で頷いている中尉。

「：フッフ、上半身とはいえ男性の裸を見ることができた上に名前を呼んでもらえるとは。もうこれはもうひと押しで行けるんじゃないか?」

何か、アウロラ中尉がブツブツ言いながらニヤニヤしているが気にしないでおこう。

「コホン：しかし、スオムスに派遣されている扶桑軍だとあれかカウハバの義勇独立飛行中隊か? 男の兵士がいるって話で持ちきりだったが、本当にいるとは。しかもそれがあの『ウラルの鬼神』とは思わなかったが」

「どうしてその名前を?」

「そりゃあれだけの戦果を挙げれば話題にもなるさ。スオムスの新聞でも一面トップになるくらいだったしな。しかし扶桑じゃ、あれなのか、男性兵士がいるのが普通なのか?」

若干血走った眼をしながら顔を近づけてくる中尉。心なしか息も荒くなっている。

「落ち着いてくださいよ、アウロラ中尉。男性兵士は自分だけしかいませんよ」

「あ、ああ、すまない、ちよつと興奮してしまった。しかし、そんな貴重な男性兵士を地球の反対側まで寄こすとは扶桑は、随分と懐が深いんだな」

「そうでもないですよ。最初は海外派遣すら拒否されましたし、任地にしても揉めにもめましたからね」

「それはそうだろう。貴重な男性を簡単に外に出すものか」

「そこを何とか、お話をしてお話して海外派遣が認めてもらったんですよ。最初の派遣先はスオムスじゃなかったんですよ。どこだかわかりますか？」

「だいたいわかるぞ。カールスラントだろう？こんな北欧の小国に男性を送るはずがない」

苦々しそうな顔をしながらそう言った中尉。

「そうです。今カールスラントへ派遣されている部隊にツテがあるので混ぜてもらおうとしたんですが、派遣の一カ月ほど前になって止められたんですよ」

「上が外に出すのを嫌がったのか？」

「健康上の理由ですよ。腕の傷跡が痛む時があるので軍医に相談したら上に伝わって海外行きがおじやんになりかけたんですよ。で、なんやかんやあって派遣要請があったスオムスになった訳です」

そう言いながら左腕の傷跡をさする。

「なるほど。ネウロイの侵攻もなさそうな国で派遣ついでに療養して来いってことだったんだな」

「ま、そういうことでしょうね」

ベッドの近くに持ってきた椅子に座っている中尉。腕を組んでいるためか胸が強調されるような形となっておりつついつい目が行ってしまう。視線をそらしつつ先程から気になっていたことを中尉に尋ねた

「それにしても中尉、扶桑語が大変お上手ですね。どこで習われたんですか？」

中尉の日本語もとい扶桑語のうまさに驚いてそう尋ねた。しかし、かえってきたのは驚くものであった。

「扶桑語？何を言ってるんだ？私はさつきからずっとスオムス語しか話していないぞ。それに私がスオムス語以外で話せるものはガリア語くらいだ。最初から会話で使っているのはスオムス語だ。むしろ私のほうが、どこでスオムス語を習ったのか聞きたいくらいさ」

中尉の言ったことが一瞬理解できずに固まった。スオムス語？何を言っているんだ、この中尉は。自分が話しているのは扶桑語のはずだろうか？そんな思いが頭の中を駆け巡る。

「中尉も冗談が好きですね……。一体何を言っているんです？自分はスオムス語なんてここに来るまで聞いてこともありませんし当然話したこともないですよ。そんな人間がいきなりスオムス語を話せるわけないじゃないですか。」

「しかしなあ……。現にこうやって私と会話できているじゃないか。なんなら今ここで証明してやろうか？」

そう言って中尉はテントの入り口へと向かっていきしばらく誰かと話していた。

「何です。彼の面倒は自分がみるって言ってたじゃないですか……」

中尉に連れられてブツブツ言いながらテントの入り口から入ってきたのはプラチナブロンドの髪を持った女性だった。こちらと目が合い数秒ほど固まったのち顔に微笑みを浮かべながら近づいてきた。しかしよく見るとそのほほえみは少し引きつったものであった。

「目が覚めたのですね。初めまして、ユーティライネン中尉の従兵を務めておりますヴィルマ・エステリ・カウツピラ兵曹と申します。以後お見知りおきを」

「どうも、扶桑皇国陸軍所属 伊勢崎 正伍長であります」

「まさかこんな前線で高名な『ウラルの鬼神』にお目にかかることができるとは、握手していただいてもよろしいでしょうか」

そう言って手を差し出してくるカウツピラ兵曹。その北歐らしい雪のように白い頬は、ほんのりと赤く染まっていた。

「そんなたいそうな名前で呼ばれる程できた人間じゃないですが、自分でよければ」

そう言つて微笑みながら差し出された手を握る。その手は、兵士らしくゴツゴツとしたものであつたが女性らしい柔らかさが少し残つた手であつた。しかし、それに対してカウツピラ兵曹の顔は女性がしてもいいものではなかつた。目は大きく見開かれ充血し、頬は赤く染まり鼻からは真つ赤な体液が垂れて白色のギリースーツを染めつつあつた。

「ハア、ハア：お、男の人の手つてこんな感じだつたんだあ：。もう今晚のネタは決まつたわあ：」

どれほど時間、カウツピラ兵曹と握手していたのだろうか。時間にしてはそれほど多くないだろうが自分の中では数時間ほどたつたように思えたとき中尉がカウツピラ兵曹の肩に手を置きながら声をかけた。

「へひな鳥」そこまでにしておけよ。ほら詰めとけ」

そう言つてカウピツラ兵曹にちり紙を差し出す中尉。中尉の声で我に返つたカウピツラ兵曹は周囲に視線を彷徨させたのち慌てて手を離した。

「部下が失礼したな」

鼻にちり紙を詰めている兵曹をあきれたような目で見ながらそう中尉が謝罪してきた。

「で、へひな鳥」どうだ彼の『スオムス語』は？うまいもんだらう」「ええ、驚きましたよ。中尉から聞いた時は冗談かと思いましたが、まさかここまでとは。ちよつとした訛りがあるみたいですが注意深くきかないと全くわからないです。それに、これくらい流暢に話せるのならスオムスで暮らしていくことができるでしょうね」

そう言いながらチラチラと意味ありげな視線を向けてくる兵曹。だが、今の自分にとってそれはどうでもいいことだつた。流暢なスオムス語を話している？中尉だけなら冗談だと思えたが、兵曹も自分がスオムス語を話していると言つていた。自分には注意や兵曹が日本語もとい扶桑語を話しているように聞こえる。どういうことだと思考の渦に飲まれそうになつた時中尉に肩をゆすられた。

「おい、大丈夫か」

いきなりの事だったのでなんとか頷くことで大丈夫だという意思表示をする。

「まあ、理解できないのも仕方ない。イセザキ伍長、いきなりではないが家族や親戚にウィッチがいたか？」

「ええ、います。母がウィッチでしたし、親戚にウィッチだった人が何人かいます」

いきなり何を聞いてくるんだという感情を抑えながら中尉の質問に答える。

「そうか。…ウィッチの血を輸血されたことはあるか？」

「さつきから何を聞いていますか中尉？」

割り込むようにカウツピラ兵曹がアウロラ中尉へと尋ねる。先程からしている質問の意図がつかめないようだ。

「伍長がスオムス語を話せる訳に心当たりがあつてな。もう一回聞くぞウィッチの血を輸血されたことは？」

「基地が襲撃されたときの負傷の治療で輸血された血の中に多分ウィッチから採血したのもあつたと思いますが、それが？」

「それが原因だよ。士官学校にいたころ読んだ本の中に、魔力を持たないものに魔力を付与する実験を書いたものがあつたんだ。その本によれば、どうやら魔力の因子を刺激することができれば魔力が発現させられるようだな。どうやら、伍長にはその条件が整つていたみたいだな」

そう言いながらやれやれといった身振りを行う中尉。その手にはいつ持ってきたのかヴィーナの瓶があつた。

「中尉、質問よろしいでしょうか」

おずおずといった様子で手をあげたのはベッドのそばにいたカウツピラ兵曹だった。

「どうした〈へひな鳥〉。何かわからないことがあつたのか？」

「先程の中尉の話の話を聞くとイセザキ伍長が魔力を発現させたことになるんですけど、何も変わっていませんか？」

「そりゃあ、そうだろう。何しろ魔力がほんのわずかだからな。せいぜいこれくらいなもんだらうよ」



そう言つて中尉は小指の爪の先辺りを指した。

「本の結果も似たようなものだったしな。ま、外国語を勉強しなくてもいいくらいにとらえておけばいいさ」

落ち着いた態度の中尉。それと対照的に、兵曹は慌てた様子だった。

「そんな落ち着いていてもいいのですか!? 報告しないといけないのでは!!」

「落ち着けへひな鳥、よく考えてみる男が魔力を発現させたなんて上に報告した途端に彼は扶桑に戻されて研究所で過ごさなきやならない羽目になるんだぞ。それを考えるところにいる人間の胸の内に収めておく方が彼のためになると思わないか? それに彼にしばらくいてもらえれば士気の向上も図れることができると思うのだが」

中尉の言葉を聞きしばらく考え込む兵曹。

「確かに中尉がおっしゃる通りです。イセザキ伍長には、ここしばらくらく安静にしていただきましよう」

ここには彼女たちを止めることができる人物がいなのだろうか。

「そんなに迷惑をかけるわけにはいかないので、迎えを呼んでいただけると大変ありがたいのですが…」

若干小さい声で中尉達に声をかける。

「ああ、迎えの話なんだが残念ながら、道路が先日の吹雪のせいで埋まってしまったみたいだな。何とか復旧させようとしているみたいだが人手が足りないようだ。すまないがもう少しここにいてもらう。なに、必要なものがあれば言ってくれできる限り用意するさ」

「わざわざそこまでしていただかなくても地図とスキー板を貸していただければ自力で戻りますから」

「それはやめといたほうがいいぞ。あの森は地元の間人でさえ迷うことがあるんだ、そんなところを土地勘のない奴が行くのはやめた方がいい。しかも、吹雪の中をさまよっていたんだどこをどう歩いてきたか覚えていないだろう?」

中尉にかなり痛いところを突かれた。実際、吹雪の中をさまよい気づけばベッドの上に寝かされていたのである。どこをどう歩いてき

たなんて覚えているはずがない。

「まあ、ここにしばらくいれば迎えは来るんだ。女だらけでアレかもしれないが我慢してくれ」

そう言つて豪快に笑う中尉。

「すみませんが中尉、ちよつといいですか?」

「どうしたへひな鳥?」

「彼の寝る場所は どうします? 予備のテントで寝ても」「ここでいいだろう」それでいいんですか、中尉?」

「いいも悪いも、男性を寒いところで寝かせるわけにはいかないだろう。それにこの指揮官用のテントなら、他のテントより広いシートもついている。それに一応ベッドもある。客人を迎えるには申し分ない場所じゃないか」

「もしイセザキ伍長がここに寝ることになったとして、中尉はどこでお眠りになられるのですか? まさか、このテントで寝るつもりですか」

「そのつもりだが?」

「どうして中尉のテントで寝る必要があるんですか? 特に理由がないですし、男女一緒というのはどうかと思われませんが」

「自分に与えられたテントで寝て何が悪い? それに、伍長に何もするつもりはないぞ。うん」

そう答える中尉だが視線は明らかに泳いでいた。

「本当ですか? やましいことがないなら目をしっかりと見ることが出来るはずですよ? なのに、なんで視線をそらしているんですか。やっぱり、やましいことを考えていたんですよね」

「そういうへひな鳥は どうなんだ!? 伍長のテントに理由をつけて行くとか考えていたんじゃないだろうな?」

「そ、そんなことあるわけじゃないですか。大体、中尉の方こそ、このテントでどうやって寝るつもりだったんですか」

「それは、ほら、アレだ。床に寝床を作つてそこで寝るつもりだったんだ。それなら何も問題はないだろうが」

「大ありじゃないですか。絶対寝ほけたとか言つて、伍長の寝てい

るところに入り込む気満々ですよね!？」

「それは。お前もだろうが〈ひな鳥〉!!」

「わ、私は中尉みたいにやましいことなんて考えていません!!」

「私がそういうことしか考えてないみたいなき草だな!」

「実際そうでしょう。その机の下から2番目の引き出しの書類の下に隠してる本を伍長に見せてもいいんですよ?」

「やってみろ、お前を雪に埋めてやるぞ」

カウツピラ兵曹と中尉は互いの胸倉をつかみかからんばかりの勢いであった。自分はただただ、オロオロとしながら見守るばかりであった。

吹雪はあらゆるものをもたらした

前線では兵士たちへわずかな休息を

後方では補給を滞らせ

人には新たな出会いを

そして彼には受難をもたらそうとしていた。

それは、夜に降る雪のように静かに彼のもとへ迫っていた

それに気づく者はこの場に、そして世界全体にも知る者はいなかった。

そして、それは突如として彼に降りかかることになるのであった。